
ルセカ一の章

夏川まさむ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ルセカ一の章

【NZコード】

N9741C

【作者名】

夏川まさむ

【あらすじ】

王都サークに流れ着いた少年は、酒場で富廷騎士ガブレイといざござに。その場を鎮めたのは、美しい女騎士シースティア・ラ・ソールだった。彼女は少年が英雄と同じ名であることを知る。

序章

星が降り落ちそうなほど満天にまたたく夜、少女は産まれた。
ルセカーよ、少女を守りたまえ。

命運に光明あれ。
行いに誉れあれ。

序章 剣をもつ少年

夕刻の王都。夕日の帯に藍が混じるには少し早い。西の空は、今やつと金色の太陽から橙色だいだいいろを吸い出したところだ。

大自然の時計を頼りに、男は今日の仕事の残りを仕上げに掛かり、女は夕食の炊き出しの準備を始める。あるいは、早々に店を置む商人。夕刻の閉門に間に合わせるため入都の手続きを急ぐ旅人と官吏。そして、これからが本時の商売、これから賑にぎわう街路。

王都には多くの人間がいて多様。例えば、この王都サークに剣を持つた人間が珍しいはずはない。この国には騎士がいて、兵士がいて傭兵がいて。だから、人々のその少年に対する珍妙なものを見るような視線は、彼が剣を持っているという事実に向けられてはいなかつた。

当の少年、十三、四の年頃で髪は濃い茶色。それもぼさぼさで、伸びた毛を後ろで結わえてなんとか形になつてている。手入れとは無縁の針金のような髪だ。身形は埃っぽい服の上に、なるほど旅の途中で地べたに寝ようが一向に心苦しくもならないだろう、ある意味では理にかなつたずたぼろのマントが両肩に被さつていて、平穩な今時、野良猫の方がましな格好をするというものだ。

加えて、彼が腰に提げる剣。少年は、自身の痩せた身体にはやや大きすぎる剣を太い革の剣帯で腰に吊り下げていた。剣帯はどうにか腰骨に引っ掛けているという程にずり下がっており、その印象はだぶだぶの服を着込んでいる、という感じに似ていた。

人々の視線は剣を持つ事実ではなく、剣を持つに不釣合いな少年の風貌に向けられていたのだ。が、当の少年は好奇の視線も何知らぬ顔で王都の雑踏をゆく。

そんな彼が、ぴたりと足を止めた。まるで突然、吸い寄せられるよう九十度向きを変える。彼がぐぐつたのは、なんということもない、ごくあり当たりの酒場である。

そんなところに何があるというのか。

あまりに唐突な少年の行動は、いつそう道ゆく人の興味を引いた。物見高い暇人は、さり気なさを装つて酒場へと後追う。そうでない者は、周りの呆気にとられた表情を見て、自分がどんな顔をしているかに気付くと、夕刻の忙しさを思い出して道を急いだ。

道端と同様の視線が、新たなる珍客に注がれる。彼を面白がった客の一人が席を空け、店の主人に彼のための酒をつがさせた。

少年の為に混雜した店に道がつくられる。彼は一度だけ立ち止まる、注視の中ゆっくりと歩み寄つて、男の隣に置かれた杯を一息に飲み干した。その間に酒を用意させた男の手が少年の剣に延びる。興味が何気なく手を剣へ引いたのだろう。周囲の人々が好奇以外で少年に一日置いたのはこの時だった。

「俺の剣に手を触れないでくれ」

男の手がびくりと止まる。

少年から剣が取り上げられることを予想した人々は、彼が振り向きもせず男の手の動きを察したのを驚いたのだった。

「酒、うまかった。ありがとう」と、
朴訥ぼくとつに少年は礼を言つ。

期待以上に面白い対応をしてくれた少年に、ほう、と感嘆の息が

周囲で漏れた。

「なあ」

少年が口を開くと、また人の注目を集めた。今度は何だ。今日はいい酒の肴を得た。

「騎士になるにはどうしたらいいんだ?」

少年は店の親父に向かつて言った。

なるほど、彼も同じ年頃の当たり前の少年と同じく騎士に憧れていた。そう思つと周囲は少し興醒めした気がしたのだが、しかし、このやりとりの観衆たちは、思つほどに興味を削がれていなかつた。

「聞き捨てならんな小僧」

新たな登場人物に店内は騒ついた。少年がカウンターから振り返ると、そこに三十半ばというくらいの、マントを羽織つた男が立っていた。マントを含めて、整つた身形からはある程度の身分が窺える。そう、騎士くらいの。だが、当たり前の少年が夢見る騎士像はその男にはなかつた。そしてこの少年自身も、その男の細長い頭部の上に張りついた嫌味な顔つきから好印象を得てはいなうだ。

「これはガブレイの旦那だんな」

主人が無愛想な顔の上に無理遣り愛想笑いをつくる。少年は店の雰囲気が悪くなつたのを感じとつた。

「お前のような薄汚いのが騎士にならうものなら、我が国の先行きが危ういわ」

「運が悪いな坊主、やつこさん、眼の上のたんこぶがどうにかできないんで当たり散らしてんだ。適当に相手しつけ」

少年の後ろから主人が耳打ちするのをガブレイが睨んだ。主人は知らんぷりをして仕事に戻る。

「随分と大層なものを持っているようだが……」

態度と身長差で見下しながら、ガブレイは顔を寄せて少年の剣帯に腕をのばす。ゆっくりとした語調とは裏腹にその手は素早い。

「……どうせ盗品なのだろう!」

しかし、ガブレイの手は空を掴み、逆に少年がその手首を押さえ

ていた。

「俺の剣に触るな！」

少年の右こぶしがガブレイの顔面に飛ぶ。だがガブレイの方もその手首をあっさりと捕まえた。

「富廷騎士に対する礼儀ではないな」

ガブレイは少年の腕を思い切り引っ張つて、自らの身体を翻した。ひるがえ少年の身体が勢いよく床に転がる。

「その剣には盜品の疑いがある。取り調べに対しても抵抗するというのなら、処断も止むを得んな」

ガブレイは剣を抜いた。まさに言い掛けだ。それを黙つて見ているほど、この国の人々は不健全ではなかつた。

「横暴だぞ！」

店のどこからか声があがつたが、しかしこの騎士の横暴さを制止するには欠ける。

「あんたみたいなのが騎士か。この国、どうかしてる」

少年の独白にガブレイの眉がぴくりと跳ねた。

「剣を抜いても構わんぞ」

「あんたには勿体無くて、この剣は使えない」

恐いもの知らずで言つた台詞では、どうやらなかつた。額から汗がにじりでている。

「貴様……！」

ガブレイの反射的な怒りは剣を持つ右腕を振り上げさせた。

「そこまで……！」

振り上げられたガブレイの剣を止めたのは、澄んだ女性の声だった。大きな声でもなければ、竦むような恐ろしさも無い。ただ、空氣を打つ凜とした声が、剣を持つ腕を制した。

「彼の剣が盗品かどうかはともかく、抜かれていない以上あなたがその剣を振り下ろすのは罪に当たりますよ？ なにせ彼は無抵抗なのですから」

女性の声が指摘する。確かに、剣を抜かない相手に対して、ガブ

レイの行動は騎士道と、なにより彼らが守るべき法に反した。挑発に乗らなかつた少年は賢かつた。それとも本当に意地で抜かなかつたのか。

観衆は、ありもしない少年の思惑に感嘆し、少年を救つた女性に声援を送つた。

「シースティア様だ！」

その女性は、店の奥の卓から騒ぎの中心へと進みでた。彼女の羽織るマントがリズミカルな歩調に揺れる。マントを留める胸元の留め具はガブレイと同じ、風と芽吹きを具象化した紋章がかたどられたものだ。二人の衣装はまったく異なるから、おそらく平服に身分を示す留め具だけを身につけているのだろう。ということは、彼女も宮廷騎士であるわけであり、すらりとくびれた腰には美しく飾られた腰帯ではなく剣帯が巻かれていた。その姿は男装の麗人、とうには、やや似合いすぎた、まったくの騎士姿であった。

「これ以上、宮廷騎士の名譽と品格を傷つけないで頂きたいものね、ガブレイ殿」

彼女、シースティアは、わずかに赤みを帯びた栗色の髪を肩から払つた。緩やかに波打つ艶やかな髪が背中にすべる。白いマントに、それはよく映えた。

「やん」となき身分の方に取り入つて手に入れた宮廷騎士位で、騎士道を語られたくはないものだな。それとも貴様の謂う騎士道とは、女の手管のことか？」

「私のことはともかく、あの方の名を汚すことは許さない」

一瞬閃いた鋭利な視線が、ガブレイを突き刺した。

「あの方とはどなたのことかな？ 私は君についてまことしやかに囁かれている噂について言つてみたまでだが」

「その噂は私も知っていますよ？ その噂の出所があなたであることも。決闘を申し込むには十分な理由になりそうね。もっとも騎士の私闘は禁じられているから、世間で暗黙のうちに行われているよう非公式になるけれど。ちょうどいいわ、非公式ならすぐによくても

始められますものね。今ここで

不敵に、美しい唇が笑みをかたどる。ガブレイがたじろいだのは、本人にそのつもりがなくとも周囲にはあからさまだった。彼女を知らぬ男だつたらば自信満々に、しかも彼女の美しい肢体に対して邪な欲望を抱きつつ決闘の申し込みを受けただろう。翌朝一番に自分自身の弔鐘を聴くとも知らずに。しかし、ガブレイは知っていた。彼女がこの国で一、一の剣の使い手であることを。

「いいだろう！ その小僧の処分は貴様の好きにするがいい！」

頬を引きつらせてガブレイはマントを翻す。かつかつと靴音高く歩くのがせめてもの負け惜しみだ。

「あ、ガブレイ殿？」

女騎士シースティアは呼び止める。

「お聞き分け感謝します」

につこりと微笑む。ガブレイはいつそうの憤怒で顔を赤くした。

酒場は喝采^{かっさい}で沸き返った。

「あんた、なにもんだ？」

洗うのが先決であるうと思われる服から、床の埃をはたきながら、少年は言った。

「さつき言った眼の上のたんごぶだ」

「ちょっと、人をできものみたいに言わないで」

酒場の主人の声高な少年への耳打ちを、シースティアは笑いながら怒った。

「なかなか骨があるようね少年。敬意を表して教えてあげるわ。騎士を志す者は、酒場ではなくてまず騎士団の門を叩くものよ。何の身分もないと見習い従者になるのも難しいけど、シースティア・ラ・ソールを名指しなさい。推薦しといてあげるわ。ちょうど欠員が出了たのよ」

言つてから彼女は瞳を暗く翳^{かげ}らせたが、周囲に察せられるほどではなかつた。

「恩に着る。それから、前言撤回だ」

「なに？」

「この国どうかしてゐて言つたこと……。あんたみたいな騎士がいるんならマシだ」

「過分な褒め言葉ね。でも否定はしないわ」

彼女は騒がせたことを理由に銀貨ひとつで勘定を済ませた。彼女が口にした杯一杯にはすぎた額だ。

「それではね、少年」

それが、少年と宮廷騎士シースティア・ラ・ソールとの出会いだった。

一章　宫廷騎士シースティア・ラ・ソール

1

大商人ポーエックの街道を南下した地に、サークス王国の王都サーキはある。

サークスは、かつてカルン大河と呼ばれたカルン川流域の沃土による農耕と、その河口におかれた港による交易によって栄える国だ。暦は春、種蒔きを終えたばかりの、新緑も清々しい季節。港の方でも冬時期の海の荒れが治まり、交易船が寄港しはじめて活気に湧く季節である。

サークスという国自体が、繁栄を約束された春の時代にあった。

王都の中心に程近い、つまり王宮の近辺を囲む高級地にソール・デレフ伯の邸^{やしき}はあった。伯は王国の西端に領地を持つ中級の貴族で、普段は領地経営を代官に任せ、宫廷に出仕している。彼には、今年十九になる養女^{よめ}がいた。生まれて間もない友人の遺児^{いきじ}を引き取つてはや十九年。いまや彼女は吟遊詩人の美貌麗声、音曲や刺繡など、よほど女らしい事より、剣を好んで女だてらに宫廷騎士を務める市井にも評判の娘である。

今日も、ソール・デレフ伯の邸では庭に並んだ樹木に巣をつくる野鳥で賑やかだ。

季節がくると、毎朝日の出とともに騒がしくなる。その内、巣には卵が産まれ、余計に騒がしさが増すだろう。その光景は、彼女の私室の一階の窓からも見えた。

鳥の声に微睡^{まどろみ}ながら春眠の心地よさに浸つていたが、いよいよ窓から日差しが差し込むようになると、シースティアは観念して起きることにした。明るすぎる朝日が少し眼にいたい。気怠さを感じ

ながら寝床から裸体に近い体を起こす。従者の名を呼んで、あるはずのない返事を待つ。欠伸を呑みながら意識がはつきりするにつれ、その名の持ち主がもういな事を思い出すと、彼女は別の召使いを呼んだ。

年季の入った女の召使いが彼女の身仕度を手伝う間、シースティアは昨日の出来事をおぼろげに思い出す。寝かけた頭のなかに、それは意味もなく思い出され、そして記憶の引き出しに再びしまわると、彼女の寝かけた頭は出仕の遅刻の言い訳を考えることに注ぎ込まれた。

結局、彼女が王城の騎士門に着いたのは、定時を一時間も過ぎてからだった。

騎士門とは、王城にある南向きの正門と残る三方の小門とは別に加えて構えられた南東の門のことを指す。王城の南東にはそこから直通して騎士団の棟があり、騎士門は正門と並んで強固に造られた門であつて、武門の象徴といえた。しかし強固といえども、あくまで象徴に過ぎない。王都の外壁を突破されるような戦に、勝ち戦は見込めないからだ。

騎士門に辿り着いたとき、シースティアの頭に騎士長を納得させられる言い訳は思いついていなかつた。

城壁を左手に、騎士門をあと二十歩程といつとこりで馬を止めて鞍上で唸る。駄目だ、どうしても思い浮かばない。このまま踵を返して仮病でも使おうか。しかし風邪一つひかない自分が病などと云えば、男どもは嫌な誤解をしてくれるだろう。ことにガブレイなどにはいい嘲笑の種にされてしまつ。例え自分が聞いていないところであつても、あの男に笑われるのは身の毛がよだつほど不愉快だつた。

思わず想像して眉間にしわを寄せた彼女は、見慣れないものを騎士門の脇に見つけた。塵芥の固まり、ではなくて何かが入つたずた

袋、でもない。シースティアは言葉でそれを表現しようとしてこのとく失敗すると、それが如何なるものかを確かめるためにも、とりあえず騎士門はぐぐる事にした。

「シースティア様、おはようございます」

門兵が馬上のシースティアに挨拶する。だが、彼女の視線はすでに正体不明のずた袋にあった。

「おいこり、お前！ シースティア様がおいでになつたぞ」

門兵が叱り付ける。すると、むくつ、とずた袋が顔を上げた。ずた袋ではなくて人間だ。それには随分と汚いが一応、という修飾が加わる。

ぼさぼさ頭にほこり模様のマント、腰には剣帯。シースティアは今朝方記憶の隅にあつたものを再び引っ張りだした。

「ああ、昨日の少年か！」

「申し訳ありません。この小僧があなたの推薦だとぬかしまして、早朝から入れると騒ぐものですから。念の為、確認しておこうと、そして門兵は遠慮がちに、

「……あの、お知り合いなのでしょうか」と付け加えた。

「じめんなさい、悪かつた」

三時間待つたといふ少年の言葉に、彼女は笑顔で謝った。騎士長に遅刻の挨拶を行つた後、彼女の控え部屋のことである。

騎士の多くは王城内の騎士団棟にある宿舎に寄宿するが、彼女の様な貴族家の子息令嬢ともなると話は違つ。また、騎士の位もいくつかに分かれ、この国で宮廷騎士といえば、騎士団の中で特に貴族並みに王宮への出入りに自由が利き、具体的には国王の直臣待遇で玉座の間まで入廷を許された地位にある騎士ということになる。

彼女の場合は貴族でもあり、騎士としても宮廷騎士の地位を持つ、

いわば高級士官である。彼女ほどになると、騎士団内に血室が与えられるわけである。

さて、王城にわずかながらも居室を構える彼女は、非常に機嫌が良かつた。騎士長は公用で定時の出仕に間に合はず、まだ姿を見せていないと知つたからだつた。

「で、少年。名前を聞いていなかつたわね」

「ルセカー」

簡素な木の椅子に座らされた少年は、行儀よく両手を膝の上に乗せて答えた。シースティアは自分の机からそれに向き合つた。

「……ルセカー、何？ それとも何ルセカー？」

「ない、ただのルセカー。他にもあつたけど、今はそれだけだ」「なかなか複雑そうね。それに大した名前だわ。ローケアークの騎士と同じ名だなんて」

ローケアークの騎士ルセカーといえば吟遊詩人に歌われるほどの名声を持つ騎士である。ローケアーク地方の戦乱を、その武勇と知識で治め、平和を取り戻したという最も新しい伝説だつた。彼はまだ存命していく、三十も越えてはいなのはずだ。

「まあいいわ。ともかくあなたは今日から私付きの従者になるわけだけど……」

そこまで言つて彼女は少し顔をしかめた。

「……ちょっと、あなた臭うわよ？ ちゃんと宿で湯浴みをしたの？」

「宿には泊まつてない。金が無いから」

よくもまあこの王都で警備兵に咎められなかつたものだ。夜間においても巡回の兵が厳しく王都を取り締まつている。王都には物乞いなど浮浪者をはじめとする貧民がいないが、存在しないのではなく警備兵がそういう市民権のない者を取り締まつて追い出しているのである。

「お金が無いって、昨日の酒代はどうしたの！？」

「あれはどつかのおっさんのおじいさんのおつりだった。酒場の親父に飯も食わせ

てもらつたし……見物料だつて」

「それでも、あなた旅してこの国まで来たんでしょう?」

少年が旅姿をしていればそのくらいは分かる。少年は「ぐぐ」と一度頷いた。

「路銀はどうしたの」

「使い切つた。一年前に。あとは農家で働いて食わせてもらつたりしてたな」

当然、何日も空腹で過ごすこともあった。旅はそんな状態で峠道を歩かせたりと、身体を酷使させることもある。のたれ死に寸前までいったこともあったが、それでもやつていけたのは、ひとえに生き延びようとする強い気概があったからだ。そのところの説明は、少年は特に加えなかつた。

生き延びて、生き延びた先に目的があるわけでもなかつた。生きるために旅をしていた様なものだ。今は違うが。

「わかつた、ようくわかつたわ。あなたの一番最初の仕事は……」

断末魔の「ことき悲鳴が、騎士団宿舎の水場から騎士団棟全体に響き渡つたのは、それから数分後、真昼になろうとする時刻のことだった。

何事かと仕事中の者は顔を上げ、厩舎の馬は飼い葉桶から鼻面を上げた。手すきの者などはわざわざ水場まで見物に訪れた。

泉水の脇で、シースティアガルセカーの服をひん剥いて手すから洗つてやつているのを彼らは面白そうに眺めた。彼女手すから聞くだけ聞いた者には羨ましがる者が多くいるだろうが、手すから石磨き用のモップを持つて、とくれば辞退願いたいところだ。

少年はモップの硬い毛でガシガシと磨かれて文字通り垢剥けると従者用の支給品の服を着せられ、今度は散髪だ。

「なにもう、硬い髪ね! 洗髪くらいまめになさい!..」

鉄はさみが刃こぼれしそうな、針金のような髪をばさばさと切り落とす。

小一時間後にはさっぱりとした従者姿のルセカーボー少年が出来上がり、見栄えの悪さはあまり変わっていなかった。なにしろ、ぼうぼうがぼさぼさに変わっただけであるから。

「とりあえず、形だけは何とかなったわね」

溜め息をつくと、シースティアは腕組みしてルセカーボーの爪先から頭のてっぺんまでを、一通り值踏みしてみる。

「ほんと、取り敢えずね」

彼女はもういちど眉根を寄せた。

「ど、どうでもいいだろ、格好なんて！」

顔を真っ赤にしてルセカーボーは叫んだ。なにしろ、服を残らずひん剥かれたのだ。纖細な少年心は複雑である。

「さてと、最後に……」

「まだあるのか！」

「その剣を預かるわ」

シースは腕組みしたまま人差し指を立てて言った。

「これは駄目だ！」

ルセカーボーはずたぼろのマントにくるまれた幅広の剣を、まるで玩具を取り上げられそうになつた子供のように抱き締めた。彼がシースに向ける眼差しは、大切な何かを奪い去られる怯えを含んでいるように見える。それを見たシースティアは、一度うつむいて眼を閉じると、真摯な瞳を静かに見開いた。

「従者は特別な場合を除いて帶剣を許されないわ。あなたが騎士になるまで、あるいは、ここを出でていくことになるまで、私が責任をもつて保管します。だから諦めなさい」

今度はルセカーボーが俯く番だった。計算も何もない躊躇いの迷いが渦巻く。騎士になる為には剣を渡さなくてはならない。それ以外にはありえない。ただ渡したくないという感情だけが彼を無為に迷わさせていた。

「大事なものなのね？」

ルセカーボーは頷く。

「約束する、きっと返すから」

子供を諭すように彼女は言葉をかける。背丈さとが頭半分低いだけだが、少年がまだ少年である事に変わりはなかった。

突然、ルセカ一は剣をマントマントとシースティアに突き出した。

「預ける、それから、子供扱いするな！」

自分がそんな風に諭されていることに気づいた彼は、赤い顔で言った。

「十二、三なんて子供じゃないの」

彼女の方もいたずらっぽい笑みが顔を覗かせる。

「十四だ！」

春はいい。寒暑に悩まされずにする。馬上の旅では願つてもない。陽光のきらめきを生命の息吹が優しく照り返すのを暖かく感じながら、騎乗の一行が王都への帰路に歩を重ねていた。

「やれ、身に過ぎる領地というのは、手にも余るものだな。様子を見るだけで骨が折れる」

「お疲れ様でした、閣下。王都に着きましたら、どうぞ羽を伸ばしてお寛ぎくださいまし。幾日かは出仕もお休みになられればよろしいかと存じます」

家人の騎士が主人を労う。

「そうしたいところだがな」

苦笑に嘆息を交えて、ソール・デレフ伯爵はそう洟らした。

日々抱えている現実が、穏やかな景色を見ているとまるで嘘のようだ。

伯爵の、真ん中で分けて左右に真つすぐ落とした髪は、元は濃い茶色をしていたのだが、今では灰色が多く占めてしまっている。髪の色を謂うのに、さてどちらを基準にして謂えばよいのか。白髪まじりの茶色か、それとも茶色のまじった灰色だろうか。伯爵の刻んできた苦労がその髪にあらわれているのである。

今ある苦労が無ければ、どれほど幸福なのだろう。そう思つて、彼は詮のない想像をやめた。今ある苦労はかけがえのないたつ一つの大きな幸せの為にある。それが無ければ、ただひたすらに虚しいだけだ。

「今はただ、この景色のみ
ひとときの幸福を、彼は満足とする」とした。

ルセカーボー少年の騎士見習い生活が始まって一週間が過ぎた。まず初日と二日目。シースティアはルセカーボーが出入り可能な城内を案内して廻つたり、仕事の要領を教えた。ルセカーボーとしては、シースティアが存外暇そのので手伝うことも少なかろうと踏んだのだが、それこそ存外で、三日目に彼は身分不確かながら騎士見習いの従者に取り立てられた幸運を不幸ではないかと疑つた。

従者の仕事が、どうして騎士の手伝いだけなものかよ、と、少年の摘み食いを見つけた騎士棟の料理長が拳とともに彼にのたまつたものである。確かにそれは甘かつたかと反省はする。しかし少年には、どうしても自分のこなしている仕事量が他の従者たちより多いような気がしてならなかつた。周囲で休憩している先任の従者達を傍目に、書類運びから馬房掃除、宿舎の備品の修理に武具の手入れ、用はいくらやつてもなくならない。少し経つて知つたのだが、用事は自然発生するのではなく、シースティアが作るか見つけてくるのだ。[冗談じやない。騎士長のご機嫌取りに彼の雑務を引き受けたシースティアが、その仕事を自分に回してくると知つたときにはさすがに腹が立つた。が、その怒りを主張する余力もなく、自由な時間ができると、怒りより眠気の方が先に体を乗つ取つてしまつので環境は一向に改善されず、再び睡魔に屈するという悪循環に陥つて数日を過ごしてしまつた。最初は余計な思考を持つ暇もなかつたが、それでも慣れれば愚痴をこぼすくらいには余裕が出てくる。しかし手が空かない。そのぶん口が達者になるものだ。

「今に見えてろ、あんにやろう」

洗濯板に、恨み辛み^あごと泡ぶくの衣服を擦り付ける。

「誰が野郎なの」

途端に拳骨が降つてくる。どこかで見張つているのではないかと疑つぐらいい地獄耳だ。

「まだまだ元氣があるよつね、明日の仕事も今日片付けてもらおうかしら」

「じょ、冗談だろ！」

城内でのルセカ一の仕事はもっぱら雑務で占められ、その忙しさは眼も廻るほどだが、ソール・デレフ伯邸ではすこしゆつくりとできた。シースティアが意地悪く見つけてくる仕事にしても絶対量は知れているし、使用人の女たちや老僕が、なぜかルセカ一を気に入つてくれて、彼らがうまいこと彼女の眼につきそうな仕事を片付けてくれたからである。そのおかげで、邸での仕事はシースティアの身の回りの世話がほとんどだった。主だったのが出仕などの身仕度、つまり着替えである。普通の貴族女性ならば、そういつた世話は女性が勤めるものだが、騎士であるからには戦場において女性の手は掛けられない。よつて普段からそういうことは従者の仕事だった。

「脱がせて」

うら若い美女が少年相手に口にするには刺激の強い台詞である。最初の日、彼女はそういうてルセカ一をからかつたが、少年の方は動じずに着替えをこなしてしまった。

「可愛いね」というのが少年の主人の感想である。

その日も、城内のあちこちを駆けずり廻つた。仕事はあらゆるところに落ちていて、拾つてくるのはシースティア、こなすのはルセカ一だ。君の従者、助かるよ人手をまわしてくれて。そんな会話が聞こえてくる様だ。株があがるのはシースティアであつてルセカ一ではない。

疲れ果てて、帰り道にシースティアの馬を牽いて歩いても、うとうとしていてどちらかというと馬に牽かれていたようなもので、道中の記憶がさっぱりないのがいい証拠だ。邸に着いてからも少々仕事があつて、それは覚えがある。つまるところ、考えなくていい時分は頭が先走つて寝ているのだ。

ようやく体と頭が同時に休める時間がきた。他の使用人たちとは離れた部屋で一日の終わりを歓談で過ごすのが日課であるようだが、ルセカーにそんな余裕などなく、今のところそれに加わったことがない。

ともあれ、睡眠は何よりも先決事項だつた。最近の彼の眠りは至福だ。あてのない旅で不安に包まれながら暗い眠りに就くよりは、考えるまもなく眠りに没頭できる。次の瞬間、起きたときにはもう朝、というのが毎度のことだったのだが、いい加減身体が慣れてしまったのか、その日、目を覚ましたときには、まだ外は夜闇に包まっていた。

やけに喉が渴く、寝ている間も体力を消耗するというのは本當だろづ。その渴きはルセカーにあつさりと微睡まじゆみを放棄させた。

ルセカーは慎重に自室を出た。シースティア付きの従者であるルセカーには彼女の隣の小部屋が宛がわれていた。つまりは隣に主人が目と耳を見張らせているわけである。別段悪いことをしている訳ではないのだが、わざわざ音を立てて苦手な人間を起こす手はない。彼女の部屋とは反対の方へ廊下を忍び歩きすると、ルセカーはそつと階段を下りた。

深夜の邸内は初めてである。寝静まつた雰囲氣からすると、夜が明けるにはまだだいぶありそうだ。

ルセカーはさっそく炊事場へ脚を運んだが、勝手が分からず水桶が見つからないので、裏庭の井戸から直接汲むことにした。

裏庭への勝手口を開く。

そこで、世界の一転を感じる。

静けさをまとう空氣に、一瞬圧倒される。そのあとも、胸を締め付けるような雰囲氣が辺りに漂つた。

空に満天の星が瞬ぐ。その瞬きとともに銀粒子が弾けて降りそうだ。

それはまるで星降る夜…………似つかない名だけど、確かにそれは
美しかつた。

空に魂を奪われそうになる。星空は天高く、遙か彼方の煌めきが
魂を誘つて止まない。広い世界に、ちっぽけな人間である自分が心
許ない不安感。それでいてこの解放感はどうだらう。

と、星が満天の空からこぼれるように流れた。自然、目線が流星
を追う。瞬きほどの間に、星の軌跡は庭の樹に遮られてしまつた。
ルセカ一の視線がそこに移つた途端、胸が騒つき始めた。何か不
自然を感じる。その樹だけが、景色になりきつていなかつた。

誰かいる。

ルセカ一は何気なしに井戸に歩み寄り、繩付きの手桶で水を汲む。
そして水を移すふりをして別の桶を拾つと、素早く樹の枝を口掛け
て投げ付けた。

「誰だ！」

誰何の返答は銀色の刃で返つてきた。引きつた顔をしながら水
の入つた手桶で飛来する短刀を受けとめる。その隙にも、樹から飛
び降りた黒い影が風のよつな速さで音もなく迫つた。

逆手に持たれた短剣が喉笛を掻き切ろうと弧を描く。ルセカ一が
思い切り仰け反ると首に赤く一筋傷が残つた。予想以上に間合いが
広い。ルセカ一には返す手もないが、手桶の
水を浴びせると声を上げて再び誰何した。

「誰だ！」

空桶を叩きつける。受けた刃が木屑を散らす。

「何事！？ ルセカ一！」

一階のバルコニーからシースティアが姿を見せた。彼女は曲者を
認めると言点して室内に舞い戻る。

「このつ！」

執拗な短剣の突きを凌ぐので手いっぱいだったルセカ一だが、侵
入の方にしても少年の思いの外の抵抗で、仕留めるのに時間を取
られすぎた。

幾許も経たないうちに、剣を手に取ったシースティアが勝手口に現れた。途端、賊は最後の一撃をルセカーレに見舞うと壇の方へ身を翻し、恐ろしい速度と跳躍でその向こう側に姿を消した。

「なんて素早い……！」

駆け付けたシースティアが賊を目にしたのは、実にほんの数秒間だけだった。彼女はそのあともすぐには緊張を解かず、周囲の気配と安全を確かめてから息を抜いた。

「大丈夫？」

足元にへたり込んでしまったルセカーレの肩に手を置いた。

「…………あ、ああ」

手を伝わつてルセカーレの緊張がどつと解けたのが分かる。シースティアは少し微笑んだ。

「それでもよく賊が侵入したのに気づいたわね」

「たまたま外に出たら、なんか変だっただけだ」

なんか変、というルセカーレの感性を理解し難かつたが、なんとなく納得はできた。

「でも、賊を発見できたのは運がいいのか悪いのか五分五分ってところよ？」

「…………なんで？」

「あの刺客、王都では有名な暗殺者なの」

「暗殺者有名でいいのか？」

「存在だけよ、正体は誰も知らないの。とにかく、運が良かつたわね。並みの騎士なら、死ぬのも気づかずに殺されてしまうほどの相手だから」

ルセカーレはその言葉とわずか数分間の死のやり取りを反芻してごくんと唾を飲むと、遅咲きながら冷汗が吹き出してくるのだった。シースティアがその賊と以前にも出くわしていたのではないか、そう思つたのは動転した気分が落ち着いた後のことである。

夜明けは何ら変わりなくやつてきた。

東の大地と別たれた朝日が邸に差し込んでいる。

邸内では爽やかな朝らしく、白一色の布地と紋様の刺繡で飾られた食卓に、量を抑えて品数をそろえた朝食が並べられる。料理は控えられ、スープやサラダ、焼きたてのパンが中心だ。品は有り体だが、種類は豊富だ。

ここ数週間、シースティアはこの食卓に一人だった。母親とは十年前に死別し、唯一の家族たる伯爵が王都を留守にしているからである。一人といつても伯爵家の食卓だ。給仕くらいは付く。ただ、ソール・デレフ家は大貴族というほどの家柄でもなく、伯爵も派手な人柄ではなかつたので、客人など席の多いとき以外は、給仕は一人に任せている。

今朝の食卓には、久しぶりにシースティア以外の人数分も用意されていた。彼女との、伯爵の分、そして普段は別棟で使用人たちと朝食を採るはずのルセカーハーの分である。

「いやなに、そう固くなることはない。今朝方、旅先から帰り着いたら賊騒ぎがあつたというじゃないか。事無きを得たのは、私が居ない間に従者になつたばかりの少年のお陰だとも耳にしてね、会つてみたくなつたというわけだよ」

ルセカーハーは初対面である伯爵家の主の声も耳に届かず、ただ得体の知れぬものを見るかのように、食卓の隅々を目だけがぐるぐると見回していた。夕食だって、こんなに皿が並んだのを見たことがない。伯爵家にきてから、それまでとは比べものにならないほど食生活が豊かになつたが、使用人が朝食までこうはいかない。量としてはさほど変わらないはずだが、種類の豊富さでルセカーハーの眼にはそう見えた。

「寝坊したのを叱るつもりで呼んだのではないのだが。逆に礼を言

いたい気持ちで招いたのだから

「お父さま、この子は寝坊くらいで恐縮するほど礼儀正しい子じゃありません」

父親の誤解を訂正すると、彼女は少年の額を指で弾く。豆鉄砲を食らったように面食らつてルセカ一は姿勢を正した。ぽよぽよ頭がひどい寝癖だ。

落ち着いた面差しの伯爵はめずらしく破顔した。普段は穏やかに笑みこそするが、声をあげて笑うことなど滅多にない。

「さすがに、エレほど良く出来た娘もそうはおらぬか」

「あの子は……」

その名が出た途端、シースティアは表情を翳らせて俯いた。

「……………エレは特別です」

曇るシースを見て、伯爵も沈黙した。親子が黙ると部屋の雰囲気も沈む。ルセカ一は居心地悪く感じながら一人が食事を再開するのを待つた。ようやく手をつけたパンも、これでは飲み込めやしない。「すまぬ。まだ思い出に語るには早すぎたか

「いえ、いいのです」

シースティアは急に明るい笑顔をつくつて話題をかえた。ルセカ一と出会ったときの事、特に騎士ガブレイにしてやつた痛快さを楽しそうに語り、ルセカ一の度胸を誉め、また彼の城での慣れない働きぶりを笑つたりなど種が尽きない。

親娘の楽しげな朝食に交じつた後、いつもどおりシースティアの身仕度を済ませてから、伯爵の見送りで王城へ出掛けた。

出仕の身仕度の間、シースティアは笑顔を作ることをやめ、何かに堪えるよつに押し黙つていた。

「なあ……………聞いていいか？」

出仕の道すがらも、シースティアは無言だった。彼女の背中に触れ難いものを感じてはいたが、ルセカ一は思い切つて訊くことにし

た。

「エレッテ、誰だ？」

王城への道中で彼女は初めて口を開いた。彼女はなぜルセカーニに馬を牽かせたがらず、ルセカーニの先に馬を往かせている。そして振り返りもせずルセカーニに答えた。

「エレは、あなたの前の私の従者」

彼女の背中に哀しみを感じて、これ以上は聞いてはいけないと胸の内に感じていたのに、ルセカーニは自分の口から追随する言葉を塞き止めることが出来なかつた。

「辞めたのか？」

「今日は随分と聞きたがりやさんね」

驚いたことに、シースティアは笑つてルセカーニを振り返つた。哀しげな微笑みではあつたが。

「答えたくないならいい。悪かった」

今度はルセカーニが眼を逸らす番だつた。予想通りの答えが返つてくるのに罪悪を感じて。

「死んだのよ」

冷たい表情だつた。そこには涙も哀しみもなく、なにかを呪うかのような冷酷さが潜んでいるかのようだつた。

あぶくが、ふわふわと空に向かつて舞つた。つるりと、虹色に輝く球体の表面をぼんやり眺めながら、主人の後ろ姿を思い出す。泣いてたのかな。

と、そんな物思いを、元気な甲高い声が妨げた。

「ちょっと！ さつさとしてよ、仕事、片付かないじやない」

びっくりして振り返ると、赤毛の少女が眩しい陽射しを遮つてルセカーニを見下ろしていた。手にある籠は、取り込んだ洗濯物がいっぱいに膨らませている。

「なんだか知らないけどさ、あんたが来てから、ちいとも仕事が

減らないのよね。いい迷惑よ

「……おまえ、誰？」

相手の無知に鼻白んだように少女は首を引いた。顔をひきつらせているのは、当然怒りによるものだ、とさえもルセカーは気づかず相手の沈黙をいぶか訝った。

「誰とは何よ失礼ねーー！」

次の瞬間、彼女の手にあつた洗濯物を、ルセカーは頭からかぶつていた。

「あ、た、し、は、ね！　あんたの尻切れとんぼのきちんと片付いてない仕事をあちこち廻つて尻拭いしている偉いお方よ！」

ふんっ、と鼻息一つ残すと、少女はくるりと回れ右してすたすた行つてしまつ。

「ま、待て」

呆気に取られて氣の抜けた声が少女を呼び止めた。少女の方は応じる様子もなかつたが、しばらく行き過ぎた後で何かしら思い返したのか足を止めた。

「なによ」

つつけんどんな口調が返つてきてルセカーは困つた。思わず呼び止めたが別に用はないのだ。

「あ、おまえ女だよな」

咄嗟^{とうさ}、急場を凌ぐ用向きを思いついた。

「あたしのどこが男に見えるつていうのよーー」

「ち、違う！」

少女が握りこぶしをつくつて肩を震わせたので慌てて宥める。それから、殴られない内に言い訳も含めて続きを切り出した。

「エレッテ従者のこと、教えて欲しいんだ」

城内で女性の従者はほとんど見かけることがない。数が少なければそれなりの面識もあるだろうとルセカーは考えたのだ。

少女は急に真顔になつてルセカーを見つめた。それは、一步引いて警戒した態度の顕^{あらわ}れだということがルセカーには分かつた。最初

はだれしも他人という旅の出会いの経験が、未知の他者に対する洞察力を、少年に備えさせていた。

「あんた、いつたい何者？」

「なに……つて、騎士見習いだ」

何者といわれても見ての通り、日は浅いが自分は騎士見習いの従者であるはずだ。だが少女はそんなことを言つてはなかつた。ただ事ではない表情の瞳が、少年の素性探りうと食い入るようになつめていた。

「どうしてエレのことを知りたがるの」

少女は質問を変えた。

「俺の前の従者で、死んだと聞いたんだ」

ルセカ一はぐくりと唾を呑んだ。これが正直なところで、それ以上はない。隠すこともなく明かすと、少女に漂う緊張感が解けたのが分かつた。

ふう、と少女は息を抜く。

「なんだ、シースティア様の新しい従者ってのはあんたなの」

少女は改めてルセカ一を上から下まで観察した。こんな風に品定めされることが多くなつたのは気のせいだろうか。

少女は、緊張は解いたが警戒を緩める気はなかつたようだ。それほどの事が、エレという少女の死にはあつたということだろうか。例えば、ソール・デレフ邸を襲つた暗殺者とのつながりとか。ルセカ一は想像の翼を広げた。だが、広げる羽はまだ小さい。それ以上に思い当る節もなければ確信もない。

「ま、いいわ、教えてあげる」

少女は接して良い度合いの線引きを定めたらしく、態度を崩した。

「エレはあたしの親友で、シースティア様付きの従者だつたわ。気立てが良くて可愛くて、シースティア様もエレをそれは信頼なさつていたの。でも一月前だつたわ。シースティア様がお屋敷にお帰りになる途中、刺客に襲われて……エレはシースティア様を守つて殺されてしまったの……とてもいい娘だつたのに」

心の傷に近づくにつれ、声色は沈む。ルセカ一は再び罪悪感に駆られた。

「すまない。思い出させて」

少女は不思議そうにルセカ一を見つめた。

「あんた、意外と優しいね」

少女はけろつとした表情で笑う。ルセカ一は、まるで嘘泣きにだまされた気分だったがその裏の真実を想えないほど浅はかではなかつた。

「その、どんな奴なんだ？……シースティア、様、つて」
途端、ぽかつと少し小さい握りこぶしが飛んできた。シースティアとの類似点を見つけてルセカ一は思った。騎士だと騎士見習いの女は乱暴だ。

「どこの従者が主人を『奴』呼ばわりするの！」

なつちやあいないんだから、とかぶつぶつと呟く少女であつた。

一方でジーンと痛む頭を抱えながら、シースティアを名指しで呼んだことがないのに気づいた。どう呼べばいいのだろう。やはり少女のように“様”を付けなければならないのだろうか。だとしたら最悪だ。

「シースティア様はお優しいから何も言わないだらうけど、きちんとさいよ？」

優しい？ 少女の認識とルセカ一のそれとの相違は突飛だ。ルセカ一の頭のうえの疑問符が見えたのか、少女はまたこつんと頭を小突いた。その時気づいたのだが、少女の背はルセカ一より少し高い。

「みえみえね、あんたつて」

「いいから教えろよ」

目線をやや持ち上げなければならぬのが癪しゃに触つたが、目で訴えるのには我慢した。

「そうね。まずは何といつても剣の腕ね。この国で一、二。五指には間違いくるわ。それでいて宫廷の貴婦人方も見劣りするほど

美しいの。そういうた事を笠に着ない素晴らしい方よ。騎士たちも尊敬してゐるし……一部例外もいるけど……。ひどいのよね、リシャール殿下との恋仲を悪く言つ輩がいて

「恋仲？」

これには驚きだ。あんなのを恋人にしたがる男が存在するとは。まあ見てくれは認めてもいい。しかし、げんこつが飛んでくる数を差し引いて割りに合うのだろうか。

ルセカ一には解らない勘定である。

「で？ 相手はなんてつたつけ。殿下ってくらいだから偉い奴か？」

「あんた、いつたい何処から来たの？ ほんとに知らないの？」

少女はルセカ一のことをみえみえだといつたが、彼女だって呆れたのがありあり判る。が、そんなことが判つてうれしいルセカ一ではない。倍に馬鹿にされた気分だ。

しうがないわね、という顔が、まるで勝ち誇つて見えるから憎らしい。

「リシャール様は、この国の王太子殿下よ。国王陛下がまだ在位にあらせられるけれど、政務を取り仕切つてるのはリシャール殿下だそうよ。知恵と美貌を兼ね備えていらして、もうぴつたりのお二人なんだから」

少々興奮気味に少女は語つた。

リシャール王子は幼少から利発で評判だつたという。王家に対する民の支持が強ければ、国の嗣子は持てはやされて然るべきだろうが、王子は事実聰明であった。世に謂う神童とは彼のことだ、十二まつりじよで政の場に頭角を現し、十五ですでに実権を握つていた。王はそれほど老齢ではなかつたがそれを容認した。凡庸で、疎むどころか逆に王子の台頭を喜んだくらいであるから、権力への執着は最高権力者としては皆無に等しいといえるだろつ。国王は王子の主君ではなく、父親だったのである。

ふわふわと舞い上がるあぶくを、やつぱり目が追つてしまつ。少女はルセカ一に、仕事を徹底指導して行つてしまつたが、聞くことを聞いてしまうと物思いの種はつきない。つまり、ソール・デレフ家はなにものかに脅かされていて、今もそれは続いているのだ。

なんとかしなければと思う。とんでもないところに来てしまつたな、とも思ったが、放りだしてゆけるほど、自分は恩知らずではないはずだ。

すくつと、ルセカ一は何かを決めて立ち上がつた。これ以上考え込んでも埒が明かないので、シースティアに問い合わせることに決めたのだ。

と、そういうえば、ルセカ一は少女の名前を聞き忘れたことも気づいた。

日も暮れる頃、ようやく雑用から解放されたルセカ一は、騎士団棟にあるシースティアの仕事部屋へ引き上げる途中だつた。

廊下の先で、可笑しそうに笑う女性の声があるので、どこかの貴婦人が騎士を訪ねて来ているのかと思った。

夕日が差す窓辺に人影が一人分。少し赤みを帯びた亞麻色の髪が、夕日を浴びていつそう赤い。

ルセカ一は立ち尽くした。

白金の髪を夕日にさらして颯爽と立つ貴公子と談笑をしているのは、何処の貴婦人でもなく、シースティアだつた。

明るく笑い、優しげに微笑み、物憂げに口を閉ざす。二人の間で交わされる言葉の端々に浮かべる彼女の表情は、いつもルセカ一が見るものとは違つていた。

やがて、娘はいとおしげに青年の胸に手をおいた。それを青年はにぎり返す。

ふと、貴公子がこちらを向いた。シースティアがそれにつられる。

「ルセカー」

彼女の唇が自分の名を紡いだとき、鼓動が高鳴るのを彼は感じた。「君の従者かい？」

「はい。ルセカー、仕事は片付いた？」

シースティアは青年に頷くと、ルセカーに訊ねた。一人の仲を隠すように、一人はいつしか握りあつた手を離していった。

「あ、ああ」

何だか、疎外感を感じる。

「そう、じゃあ、馬の用意をしておいて。すぐにいくから」

言葉が喉につつかえて言い付けに返事もできず、ルセカーはただ厩舎へと踵を返すしかなかつた。
くちづけ

背中の恋人たちの行為に、腹立しさを感じながら。

ルセカーは黙々と馬を引いた。頭のなかは苛立つたり考え込んだり、その波に合わせて歩調が変わるものだから、引かれる馬が不機嫌に嘶いた。

「ちょっと、ルセカー。もう少し歩けないの？ 馬脚が乱れるじゃない」

馬が人間の不規則な足並みに合わせようとするものだから、止まつたり動いたり、背中の上で揺すられるお尻が痛い。

「……わかつた」

さしもの彼女も、今日のルセカーの頭のなかは読めなかつた。

「そこ、右よ」

シースティアが声を掛けた。いつも通り過ぎる角だ。

「なんだ？」

ルセカーの顔は仮面だ。何のせいかは知らないが不機嫌だ。自

分でもどうしてだか分からないというのも、彼の歳なつまあることだ。

「なんだか知らないけど、そんな顔しないの。今日は」褒美に、い

い所へ連れてつてあげるから」「ちょっと膨れたルセカーリの顔を笑つて、彼女は言った。

シースティアは機嫌がよかつた。その理由を知つてゐるルセカーリが、だから不機嫌なのだと、シースティアは気づかなかつた。実をいえばルセカーリ自身も。

4（後書き）

アルファポリスのWEBコンテンツ大賞（ファンタジー小説大賞）に参加しました。よろしければぜひ投票をお願いいたします。

どこかで見たことのある店の入り口を、騎士と従者の二人連れはくぐつた。そこは一人が、主人と従者の関係となる前に出会った酒場であった。

王都へやつてきた日以来、従者の身となつたルセカ―は王都を見物するまもなく伯爵家と王城を行き来するだけの毎日であったから、このでの界隈へは今日の今日まで足を向けたことがなかつた。

「どうでもいいけど、何のこ褒美だ？」

「あら、つれない言い方ね。今夜は刺客を撃退した勇者としてもてなそうつていうのに」

ルセカ―の額を細い人差し指がつんと押しやる。

「よお、いらつしゃい」

店の入り口に一人を見つけた主人が声を掛ける。

「ちょっと、そこの席、あけてやつてくれ」

主人はそう云つて、立ち渋る先客をカウンターのむかいの席から二人ほど追つ払つて、シースティアとルセカ―のための席をつくつた。どうやらそこに陣取らなければならないようである。シースティアは苦笑して腰を落ち着けることにした。

「ふたりとも、いつぞや以来だな。いろいろ噂は聞いているよ」

「こんなことばかりやつてると、お密さん来なくなるわよ？」

「構わねえよ、あんたが来てくれりやあさ。それに奴らだつて、ゆする相手があんたなら文句ねえさ。なあ」

親父は後ろのテーブルに追いやられた常連に振つた。シースティアもそちらを振り返る。

「ごめんなさいね」

その一言で常連はたち所に顔を赤くしてしまつた。これだから男つてのは。ルセカ―は同性の情けなさに、内心で額に手をやつていた。どうもこの顔に騙されているのだ、皆は。自分がされた事をさ

れてみれば分かるだろう。服を一枚残さずひん剥かれて、隅からすみまで床ブラシで擦られたのだ。まさしく隅からすみまで。だがやつぱり喜ぶんだろうなあ、こいつらは。ほとほと美人に弱い男の性を、少年は客観的に痛感した。

その点、ルセカ－という少年には免疫があった。彼の生まれに理由があるのだが、本人が語らぬ事ゆえ伏せておきたい。

「さ、何でも頼んでいいわよ？」

「う、ああ」

と言われても、そらで言える酒の名前なんてたかが知れている。ルセカ－は旅の寒さのきで覚えたアルニムという果実酒を頼んだ。栄養価が高く酒精のきつい酒で、旅のそいつた持ち物にはもつてこいなのである。味も多彩で、渋みから甘味まで造り手の加減に委ねられていて飽きない。好む人の多い酒だが、ルセカ－の場合は他に名前が浮かばなかつたせいもあった。

「じゃ、私はエール酒を」

シーズティアもごく一般的なものを迷うことなく注文して、二人は杯を鳴らした。

その後のルセカ－といつたら、もくもくとつまみの料理に手をだすばかりで何も喋らない。シーズティアはそれを、何故だがわからぬが、上機嫌で眺めながら杯を傾けている。

「おいおいなんだ？」

主人がかやの外でつまらなさそうに声をかける。

「せつかく面白い話の種が来たと思ったのに、一人して黙っちゃって」

「いえね、ルセカ－の食欲を見てると、エレと初めて逢った時みたいだなつて思つてたの」

シーズティアはふふつ、と思い出すように笑つた。

「エレがか？」

主人はルセカ－の食べっぷりと比べるよつに思い起して意外そうだ。

「大ぐらいだつたのか？」

ルセカ一が料理を口に運ぶ合間に口をきく。

「やあね、芯の強いおしとやかな娘だつたわ。ただ、その時はどつてもお腹を空かせていたの。あなたみたいに、旅をしてここに辿り着いたつて言つてたわ。考えてみれば、私の従者は二人とも外から拾つてきたことになるのね」

おしとやか、といわれても頭から鵜呑みにはできなかつた。王都でのルセカ一の経験では、女とは本来そういう生きものではないようと思えるのだ。

「親父さんは知つてるわよね？」

「ああ、礼儀正しい娘だつたな」

「あの娘つたら、私を呼ぶときはシースでいいわつて言つたら、シース“様”つて付けたのよ？ 少し生真面目で、でも明るくて、男の子にしてみれば理想的じやない？」

シースティアが自分に振るのを聞きながら、ルセカ一は他のことを考えていた。エレというルセカ一の知らない少女の死に、深く傷ついたであろう彼女が、こうも明るく少女の話題を口にするなんて。本当はどんな思いをしているのだろう。蔭の濃い縁の瞳の奥を見つめて、ルセカ一はシースティアの心の奥底を覗き見ようと試みた。

「ど、どうしたの？」

声を上擦らせてシースティアは言う。ルセカ一の自分を見る瞳は言いようもなかつた。少年の大人びた瞳、しかしながらそれはやはり少年のもの。静かな視線に、シースティアはどぎまぎした。

「ふうん、シースでいいのか」

「え？」 とシースティアは眼を丸くした。

「オレ、なんて呼べばいいのかずつと考えてたんだ」 料理の方に向き直つて頬張る。

「なんだ、その事ね。ええ、シースでいいわ。でも、やっぱリルセ

カ一ね。エレは“様”を付けたのに」

「だつて、シースでいいんだろ」

「ふふつ、そうね」

なんだ、とシースは思った。少年の瞳は、ちょっとした物思いの瞳だつたのだ。深い意味などない、偶然垣間みえた表情にすぎなかつたのだ。

それから一人は、時が経つほどに杯を乾した。酒場は盛り場を装い、主人も一人だけを相手しているわけにもいかなくなつて、店内のそこかしこで忙しくしている。

しばらく、また二人は黙つて杯を傾けていた。

「ルセカー？」

そう、シースが呼んだとき、周囲の喧騒が、少し遠い騒めきに感じられるくらい時間が過ぎていた。

「ありがとうルセカー」

静かに、シースは感謝の言葉を口にした。「ごくん、ヒルセカーは口に含んでいた酒を一息に飲み下してしまつた。それくらい彼女の雰囲気は違つていたのだ。

「あなたが居なければ、私はエレの事でいつまでも塞ぎ込んでいたかもしない。あなたのおかげよ

そして、リシャール王子のおかげなのだろうな、ヒルセカーは思つた。

「だから、今日はそのお礼。賊を追い返したご褒美みやもとでもあるけど」
その言葉には何も返さず、ルセカーは杯の中の水面を見つめていた。

「こないだ酒場に来たのは、酒で紛らわせるため……だったのか?」
今度は、シースが無言だつた。

と、ルセカーの肩に重みがかかつた。暖かい重みだ。びっくりして身を捩ろうとすると、瞳を閉じたシースが、ルセカーの肩に寄り掛かつて穏やかな寝息をたてている。ルセカーは身じろぎをやめて固まつた。彼女の赤みを帯びた亞麻色の髪が、さらりと肩にかかるべくすぐつた氣分だ。

「ほお、ルセカー、坊やのくせに酒が強いな」

そこへ店の主人が戻ってきた。頼みもしないのに酒を注ぎ足す。

「坊やじゃない」と真顔で言い返したつもりだったが、肩のシースが気になつて、ちゃんと大人相手に張り合えたか分からぬ。ルセカ一はぐつと杯を呷つた。

「そうさな、それだけ飲んで酒に呑まれなきや一人前だ」 またまた注ぎ足す。

「それにしてもなあ、おい

主人の眼はルセカ一の肩に向いていた。

「この人を肩に眠らせるのはこの世にただ一人と思つてたよ

「それつてリシャール王子?」

「おいおい、あまり大きな声で云うものじゃないよ。周知とはいっても、なかなか公にはできない物事だからなあ。それより、お前さんも随分信頼されているようじやないか。何かあつたのか? ご褒美とかなんとかいつてたけど」

別段隠す事でもないので、ルセカ一は件の暗殺者の侵入の話を主人にしてやつた。とはいゝ、ルセカ一は自分の手柄を誇るような性格でもないから、その話は実に客観的だつた。

主人は黙つてそれを聞き遂げると、神妙に口を開いた。

「この人は優しい方だ。エレのことは俺も知つてゐる。良い娘だつたさ。だから、あの時のこの人の落ち込み様はそりやあひどかつた。そんな方だ、お前のご主人さまは。だから、家族同然の家の者を守つたお前のことを、さぞかし心強く思つたに違ひねえよ」

主人はそういうて真剣に誓めてくれた。

「お前はいいことをしたんだよ」

また、彼は酒を注ぎ足す。それをまたルセカ一は呷つた。そういえば、エレの死の真相を聞きそびれてしまつたと、ルセカ一は思つた。ぼんやりと重みのある肩を見やる。酒精が過ぎたか、少年の頬が赤い。

その日の払いは酒場の主人の奢りだった。

翌日は、出仕する必要のない休日であった。が、休みといつてもそれはシースのことであつて、ルセカーには使用人たちの手伝いなど探せば仕事はいくらでもある。ただ、早朝からシースに付き合わなくていいことを考えれば、それなりにゆっくりできた。シースも昨晩の酒のせいか、ずいぶんとのんびりしている様で、午前中はまつたく姿を見なかつた。

「ルセカー、いい加減起こしてやつてくれ。昼食の時間にもなるのにだらしがない」

昼食の食卓で、給仕の手伝いを務めるルセカーに伯爵は言った。自分の隣の部屋へ行き、ドアを叩く。予想どおり返事が無いので、しつこくノックしたあと、容赦なく扉を開けた。

やはり、彼女はまだ寝台のながだ。

「起きる」

「ルセカあ～、淑女の部屋に無断で入るなんて失礼よ」

氣急そうな声の抗議がシーツの中から洩れだした。ルセカーは無視して踏み入ると、窓を覆うカーテンを勢い良く開いた。と、眩しい陽光が差し込む。シースにはさぞかし強烈な光だろう。さながら吸血鬼のように彼女はうめいた。ただし発する言葉はその限りではないが。

「うう、一日酔い」

「淑女は一日酔いなんてしないと思つ」

「意地悪ね」

なんとか身体を起こした彼女だったが、寝呆け眼は相変わらずだった。世に謂う麗しの宫廷騎士の姿とはとても思えない。

「ねえルセカー、私の服は？」

「いつもどおり衣装セルコレ掛けにある」

「じゃ、手伝つて」

彼女が言つるのは着替えのことである。怠そうに立ち上がつた彼女の肢体を包むものは、色氣も飾り気もない夜着であつたが、ルセカーはつい顔を背けた。いつもは動じない彼らしからぬ行為である。いつぞやはこやう少年らしい反応を期待して仕組んだのに、不覚ながら彼女は気づかなかつた。

「べ、別に手伝いなんていらないだろ！ 甲冑着込むわけじゃないんだから」「

「それもそつか」とシースは欠伸を噛み殺した。

「じゃあ、オレは先に降りるからな」

ルセカーはシースが服を脱ぎだす前に素早く扉を閉じた。

「

「シースティア、午後からルセカーを借りるが、構わないかね？」

シースが昼食の席に着いたところで、伯爵はそう切り出した。ルセカーに彼女を呼びにいかせたのは、娘をたしなめるほかにその事を伝える為でもあつたようだ。

シースは食事の手を休めると、ちょっとだけ思案顔になつた。

給仕の手伝いで、今日は後ろに控えていたルセカーが、親娘の会話に思いがけず自分の名前が出たので、ついつい二人の顔を交互に見やつて成り行きを見守つた。なにしろ自分のことながら、従者である身には決定権がないので、気になつてしまふがいい。従者とか召使いとか、そういうた境遇で長く働いている人間には当たり前でも、ルセカーは旅の間、いや、生まれて物心ついてからは自分で決めて生きてきたのだ。それが思い通りにならうとなるまいと。今は従者という立場を彼なりに理解して務めているようではあつたが。

「ええいいわ、別段用事はないから」

思案顔などしてはみたが、答えたとおり、することがないのは考

えるまでもないことにシースは思い当つたのだつた。

「そうか。ではルセカ一、聞いてのとおりだから、あとで私の部屋にきてくれ」

「わ……はい」

わかつた、と口のすぐそこまで出かかるのをなんとか止めて、ルセカ一は従者らしく承諾した。

二人の食事のあと、厨房で自分の食事を採ると、手伝いはいらなから早くお館様の所へいきな、といつ料理人の忠告に従つてルセカ一は伯爵の私室に出向いた。

「やあ、よくきたね」

伯爵は机の椅子からルセカ一を出迎えた。机の上は使用人に触れさせないらしく、紙片が乱雑に重ねられ、あるいは散らかっている。その内の、ちょうど封をし終えた便箋が、彼の手にあつた。

「君に頼みたいことというのは、この手紙なんだが。これを、ワスマイルという男の所へ届けてほしい。大事なことなので、誰にも一切喋つてはいけない……意味は分かるかな？」

ルセカ一は頷いた。が、彼が理解したのは表層的な意味の上でであつた。だから、彼はちょっと考えてこう訊いた。

「シースにも？」

と、伯爵ははつきり頷いた。

「シースティアにもだ」

誰にも喋つてはいけない。その言葉を重く捉えるかどうか、また人の感覚によつては、誰にも、という言葉が適用される第三者の範囲が変わる。ちょっととした内緒事をごく親しい人物に問われた時。また、秘密である、という言葉の意味を軽く受けとめた時。無意識には言葉の制止を破る。これは他者の秘密を持たされた人物の価値基準によつて左右される判断だ。この相手になら喋つてもいいか、などと勝手に判断したり、持たされた秘密がその人物の価値観から

みて些細なことが、それとも重大であるかによつて、その秘密を保持するか、たやすく喋つても良いかをその人物が勝手に判断してしまつ。その判断は、本当は秘密を与えた人物がして良いものではない。秘密を与えた人間がするものである。口の軽い人とは、喋つても良いかどうかの判断基準が厳しくない人のことではなく、そうやって勝手に判断する人のことである。こういう人間は悪気もなく秘密を人に喋つてしまつ。だつて、彼らは自分の価値基準にしたがつてちゃんと秘密を守つているのだから。

逆に口の堅い人間とは、この場合ルセカ一ーを指すのだろう。伯爵が、指示を理解したかどうかを確認した意味を考え、少年は伯爵の判断基準を改めて尋ねたのである。

伯爵は満足気に微笑んだ。

「ルセカ一ーに任せれば安心だ。そう、それと護身用に剣を持つていくといい。剣はシースティアに私が許可したからと伝えて一時返してもらひなさい」

伯爵は、ワスマイルという男の居場所と付け足して言つた。教えられたのは王都の外にある。さほど遠くはない。日没には行つて帰つてこれるだろう。

馬を使うことも許されたルセカ一ーは、さつそく剣^{ベルト}帯を腰に巻いて屋敷を発つた。

選んだ馬は、伯爵家の持ち馬のうちの、氣性のおとなしい葦毛の牝馬である。

格好も普段の富廷騎士付きの従者服から、旅をしていた頃の自分の服に着替えた。伯爵から、周囲に身分を悟られぬ様にと言い添えられたからだ。

まず、王都は広い。街路の雜踏を抜け、門に達するまでに一時間近くかかる。門を出てからは、馬を飛ばせばすぐだ。

ルセカ一ーは東門をくぐつて教えられた場所をめざした。

王都のそばには、カルンという川が流れている。かつては大河と呼ばれ、このサークス王国の沃土は遙か昔、その大河の底にあつた。平野部には大河の名残である川岸が、崖として川の上流と下流に向かつて走っているが、それは現在の川岸から平均で五十キーブも離れた場所のことである。かつての河幅がそれほどのものだという証拠だ。

ワスマイルという男は、カルン川から王都に向かつて引かれた水路の途上にある水車小屋にいるという話だつた。

城門の外は、芽吹いた緑が鮮やかであり、また畑には豊かな土が実りを期待させるかのように黒くふくよかである。

ルセカーの視線は水路を追つて道を探した。それらしい道は一本しかなかつたのですぐにそれと判る。

時間には余裕がありそつたので急ぐことはしなかつたが、まもなくめざす水車小屋は見えた。逆に早く来すぎたかと心配した。

小屋の外見を一望して、ひと気は感じられなかつた。

水車は、刈り入れた穀物を製粉するための動力として使われる。周囲の畑が土ばかりで黒ければ、水車にも当分出番はないということがだ。

小屋の周りに転がる桶や脱穀のための農具は砂埃を被つていて、ひと気のなさは確かだ。

唯一、黒い畑の地平線でぽつんと、農夫が鍬くわを振るつているのが見える。

ルセカーは小屋の戸を慎重に押した。薄板の戸はがたがたと、今にも蝶番ちょうづがいが外れそうな音をたてて開く。

はつ、とルセカーは息を呑んだ。中で溜まっていた空気が、外気に混じつて血の臭いを運んだのだ。

次の瞬間、ルセカーは脳裏に何かを閃かせて後ろへ転がつた。

直後、元いた場所に、突き出した剣ごと屋根の梁から男が降り下りてきた。野性じみた五感か、あるいは六感か。辛くもルセカーレは剣の餌食になることを免れた。

だが、危機はまだ過ぎ去つてはいない。

でんぐり反つたせいで逆さに被つてしまつた愛用のずたぼるマントを背中の方へ跳ねのけると、すかさず剣を抜く。

こういう事態のための帶剣か……！

ルセカーレは自分の油断に舌打ちした。生命の危険が無い訳ではない事を予測するべきだつた。王都の危険無い暮らしは、そういうしたものへの心構えを緩めさせてしまつていたらしい。

「誰だ、おまえ！」

ルセカーレが素早く誰何する。問答無用で斬り殺されでは溜まらない。

男の身形は傭兵が何かだ。少なくとも人間を殺害することに躊躇の無い種類である事は容易く識れる。だが、そういう人間とて無差別に人を殺すわけではない。利がなければ不要にそれは行なわない。そして利とは、大抵が金で量られるものだ。それが得られる為の条件がそろつた上でなくば、無理を押してまで相手はこちらを殺そうとはしないだろう。

「おまえこそ誰だ、小僧」

男の問いに、ルセカーレはしばし沈黙して考えた。少なくとも、男は相手を選んで殺してくれるらしい。

「ルセカーレ、使いで来た」

「誰の使いだ」

「その前にそつちも名乗れよ」

今度は男が沈黙した。その間、互いの拳動を封じ合つように眼を逸らさない。

「俺はある人物に宛てた手紙を預かってきた。だから、あなたの名前を知りたい」

ルセカーレは悩んだ上で數をつづいた。出てきたのは……。

男が動いた。剣を横に滑らせてルセカ―の胴を狙う。心臓を掴まれたかの様にルセカ―の呼吸が止まつた。生死を分ける刹那、殺意の剣を^{かく}潜る。次の瞬きでルセカ―の剣は男の懷に飛び込んでその胸を貫いていた。

詰まつた気肺を解きほどき、呼吸を再開する。息が荒い。

人を殺したのは初めてだ。だが罪の意識は湧いてこなかつた。やらなければ自分が殺されていたと、自己正当化することもしなかつた。自分の身体能力ならば、男の胸を貫く事は可能だらうと思つて。しかし、それによつてもたらされる結果を考えた上で、それが実行できたかは微妙だ。実行することに躊躇はなかつたが、夢中であればこそだつた。その結果に罪悪を感じてはいないものの。

「いやあ、お見事だ坊主」

心臓が跳ね上がつた。無防備な背中を晒していることに、これほどの恐怖を覚えたことはない。生死の遣り取りにおいて、それがどうほど危険かをたつたいま知つたからだ。

ルセカ―は振り向きざまに剣を叩きつけた。それが、何気なくかざされた棒切れに、いとも容易く遮られてしまつたことにルセカ―は声もなく驚いた。

「落ち着けよ」

低い声の髭面が、刃を受けとめた棒切れ、鍔^{くわ}を手にして見下ろしていた。

「俺はワスマイル、ワーズ・ワスマイルだ」

「あ……」

途端に、膝の力が抜けた。がっくりと腰が地に落ちる。

「急ですまんが場所を変えるぞ」

ワーズ・ワスマイルはルセカ―の腕を引っ張り上げた。

2 (後書き)

携帯からも閲覧可能ですので、よろしけつたらぜひ利用ください。

王都の門を、再びぐぐるのには緊張した。普通にしろ、と言つワーズの声も耳には入らなかつた。

二人はお互に他人の振りをして官吏の審査を受け、門を通り抜けた。

ルセカ一は過度に緊張していたが、もともと農作業にでる農民や、ほんのわずかな時間外に出る人間を細かく取り調べたりはしないものだ。農夫姿のワーズにしても、つい今しがた出掛けた少年にしても、ほとんど素通りだ。唯一の手続きが、外出の割り符である。王都から一日出る者に対しては割り符が与えられる。再び王都に入る際、その割り符を提示すればすんなりと門を通れる様になっている。出し抜く側には出し抜きやすいが、管理する側も日になんども出入りする人間まで審査はしていられない。それなくとも、遠来する貿易商を含めた旅行者は数が多いのだ。相応の妥協であつた。

「おまえ、命懸けのやり合いは初めてか」

ワーズは丸いテーブルの正面に座る少年に訊ねた。

ルセカ一は木の器を握り締めてうつむいていた。器の中には聞いたことのない酒が満たされている。

ワーズは彼を酒場に連れてきた。野良仕事帰り目当ての安酒場だ。店のなかは目当てどおりに農夫らしき男たちが埋めている。ワーズもその一人として溶け込めているのだろう。だとすればルセカ一は少し目立つたが、何も知らない人間が想像力を働かせれば、家を飛び出して騎士をめざした少年が、現実に打ち破られて農夫の父の元へ返ってきた図、とでも見えるかも知れない。

「そう暗くなるな。殺らなければ殺られていた」

夢破れたわけではない少年を、ワーズは慰めた。

「べつに、落ち込んでいるわけじゃない。疲れただけだ」

「ならば、俺が敵か味方かも判らないうちに気を抜いて座り込むん

じゃあない

急に厳しく叱責するような口調でワーズは言った。低く押し殺した声がルセカーを圧倒した。

「あの時、俺がワスマイルの名を騙る偽物だつたら、情けなく腰を抜かしたお前は、あつさり殺されただろ?」

憮然としてルセカーは器の酒を呷る。勢い良く流れ込んだ液体が喉を灼く。途端にルセカーは咳き込んだ。味は分からぬ。たぶん不味いのだろう。酒精も飲む者に對して頓着なしにきつい。

「がぶ飲みはしない方がいいぞ? 安酒で純度が低いうえ、酒精だけはきついからな」

ワーズは態度をがらりと変えて、楽しそうに忠告した。ルセカーの眼がいつそう不機嫌になつたので、彼は本題に進むことにした。

「まず、お前さんを危険な目に遭わせたことについては、伯爵の分も合わせて謝つておく。あの男が水車小屋に居座つちまつてなあ。俺が留守の間に、知らずにやつてきた連絡役がやられちまつた」

連絡役とは、小屋で最初にルセカーが見た男の死体のことだろう。ではこの男は? ワーズ・ワスマイルという男は何者なのだろう。

伯爵との関係は?

ルセカーは疑問を抱かずにはいれなかつた。伯爵という身分の人間が関わるには、少々胡散臭い人物だ、この男は。本物の農夫では、まかり間違つてもないはずだ。伯爵は裏でこんな人間と通じて、いつたい何をやつているのだ。

「……あんた、何者だ?」

ルセカーは従者の分を忘れて訊いていた。もともと、従者の身をわきまえていた訳でもない。

「ふふん、気になるか?」

ルセカーが頷くのを見てしまつとにやける。

「ひみつだ、少年。従者は従者らしく伯爵の手紙を渡してくれればいいんだ」

ルセカーはしかめつ面して懐から伯爵の封書を引っ張りだした。

ワーズが伸びす手から、ぴつと封書を引っ込める。

「教えないと渡さない」

今度はワーズが眉間にしわを寄せる番だ。

「おまえな、伯爵に怒られるぞ」

「恐くない」

「クビになつて追い出されるぞ」

「……この際、別にいい。旅は慣れてる」

「じゃあ奥の手だ。ここでの飲み代は払つてやらん」

ぐつとルセカーアは言葉に詰まつた。なんで分かつたんだろうか、今のルセカーアは文無しだ。給金はここにきて未だ貰つていない。安酒の飲み代だつて払えるものか。

「まあ、伯爵に怒られるどころか、ここで首根つ子押さえられてタダ働きだな」

カマは掛けたみるものだ。ワーズは勝ち誇つた。その笑みが悔しくてルセカーアは自棄になつた。

「かまうもんか。旅の途中で代金代わりに働いてたこともある」

「まあムキになるな。おいおい教えてやらん事もない」

なんだか分が悪くてルセカーアは勝負を投げた。

ワーズに手紙を渡して杯を乾すと席を立つ。

「待て待て。返事が要るかもしねんだろうが」

ワーズは開封して紙面に目を通しながら、ルセカーアの肩を押されて座らせた。仕方なく、浮かせた腰をもう一度落ち着ける。

しばらく黙つて紙面の文字を追つていたワーズが口を開いた。

「お前、ルセカーアという名前なのか」

「なん……」

「ここに書いてある

「見せる」ルセカーアが横合に飛び付いて手紙をひつたくつた。

「見たつてお前……」

「馬鹿にするな、字くらい読める。ちょっとだけど……」

王都にくるまでは読めなかつた文字だが、シースが仕事の一貫と

して読み書きの手解きを始めてからは、とっかかりが出来たくらいには文字を覚えていた。だから名前くらいは読めるが、文章の読解はちょっとした暗号の解読作業に近かった。かつては未知の記号だったのだから、大した進歩ではあるが。

「…………る……セカー、ほんとだ、書いてある」

「ほれ、もういいだろが」

再びワーズが手紙をひつたくる。胸の内で彼は安堵の吐息をついた。おいそれと見せてよい中身ではないのだ。

「ちょっとお前の剣を見せてみろ」

「今度は何だよ。剣の事も書いてあるのか」

「いいから見せろ」

ルセカ一は訳が分からず渋々さし出す。その剣が目に入った途端、ワーズは顔色を変えた。手にとつて確かめ、ますます深刻な顔になる。

「おまえ、この剣をどこで手に入れた」

感情を押し殺した声だったが、その眼がルセカ一は気にくわなかつた。この剣が盗品だと疑っているのだ。あの宫廷騎士ガブレイが疑つたように。

ワーズ自身は義を持つ人間だった。だが、どうしてもその疑念は隠しきれなかつた。彼の眼はルセカ一という少年を、盗みを働くような人間でないと判断している。しかし、剣の本来の持ち主をワーズは知つていた。だからだ、ワーズの沸き上のる疑念は。

“彼”が死ぬはずが無い。ならばこの剣は盗品なのか？ しかし

“彼”は盗まれるような失敗はしない。ではやはり彼は死んだのか？ お前はなぜあいつと同じ名前を持っている？ ロークアーケの騎士ルセカ一と同じ名を。

「オレは盗んでなんかいない」

「そんなこたあ分かるてる」

「分かつてないじゃないか。あんた、疑つてる」

指摘されてワーズは認めた。そんなつもりはなかつた。確たる証

抛もなしに疑つてしまつていたことにワーズは気づいた。この日の前の少年は、自分が抱いている疑惑を嫌悪し、そして疑われることに哀しみを抱いているのだ。

ワーズは自分の眼にも自信があつたが、少年にも等しく、或いはそれ以上に人を見抜く力が備わっているのを悟り、ワーズは口を一度噤んでうつむくと謝罪の言葉を振り絞つた。

「……そうだ、疑つていい。すまん」

その声はひどく辛そうで、ルセカーはそれ以上強く言えなかつた。
「俺はその剣の持ち主を知つていい。そしてそいつは剣をみすみす盗まれるような奴じやない。まして、死ぬような奴じやない。なのに何故、お前はあいつの剣を持っている？ 教えてくれルセカー！」

俺の友と同じ名を持つ少年……あいつは、どうした？」

ワーズは真剣だった。茶化すような口振りも、おどけた表情もない。目のまえの男は、かつて少年が出逢つたルセカーという青年のことを本気で案じているのだ。

「それは……」

それは、一年前の雨の日だった……。

旅に出てから一年くらいのことだ。彼、ルセカーに出逢ったのは。旅に出て一年、なんとか生き延びていた。ただ生き延びるだけ、なんの目的もない。

いま少年が歩くのは、ルセカーが示した道標の向く先だ。それまでは、あてのない旅だった。故郷を逃げ出した少年には、生きる以外の目的が持てなかつたのだ。

その頃、少年は森林地帯を東へ向かつっていた。広大な大森林は、地図のなかの一地方を埋め尽くしている。深く踏み入れば樹海に等しい場所だつた。ただ、神々が住まうと謂われる聖原の彼方へ至る世界の果ての山、その麓に広がる真の樹海とは、人の足跡たる街道があるという一点で、おおいに異なつた。

少年は走つた。先刻から怪しくなつた雲行きが重たい雨粒を落とすまで、思うほど間がなかつた。雨水はあつという間に足元の土をぬかるみに変え、革靴を汚しはじめる。時々、ぬかるみに足を取られて危うく転びかけながら、枝の張り出した大木を見つけると、こと決めて少年は木陰に飛び込んだ。

「……ほんとに、これが街道だつていうのか」

肩で息をしながら、彼は独り言と分かつて呟いた。吐息が、湿気を帯びた空氣の中で、飽和して唇を濡らしている。

木の幹を背にすがつて、少年は来た道を眼で辿つた。自分の足あとが点々と、泥に濁つた小さな水溜まりに変わつていて。

「人知れぬ街道さ」

独白であるはずだつた少年のそれに、応えがあつた。雨音に入り交じつた言葉は、静かに悟つたかのような口調であつた。声の出所を探つて、少年が背をもたれた木の裏に回ると、一人の男が同じ幹の根元に座していた。

「この年になつてこの道に入ったのは、我々がせいぜい三、四人目

だろうな

少年が問い掛けの言葉を定められぬ内に、男は継いで言った。落ち着いた口調は、深い人格を宿した高齢者を先入観として与えたが、そうではなかつた。薄い茶色の髪をもつ男の顔は旅の汚れに塗れているものの若々しく、伸びてしまつた不精髭を剃り落とせば優れた顔立ちであるに違ひない。ただ、死者にも劣らないほど彼の顔面は蒼白であつた。

「怪我、してゐるのか」

少年は彼の左太股に突き立つ異物を見て取つた。そこには鉄芯の矢が深々と矢尻を埋めていた。少年が手当てを試みてそれを引き抜こうとすると、彼は先程までの口調と打つて変わつて鋭く制止した。少年がびくつと手を止めたのを確認して、彼は嘆息する。まるで声を上げることに相当の労力を要したかのように。それから彼は再び穏やかな口調に戻つて言つた。

「触らぬがいい。毒が塗つてある」

彼の太股に刺さつているのは普通の矢ではなかつた。その矢は矢尻のみならず全体に刃

を施され、掠めただけでも毒殺が可能な暗殺に用いる類の武器だつた。矢尻は鈎状になり、全体が刃であることも相俟つて、引き抜いて治療することを困難にさせる、残虐性の高い武器なのである。そして彼を死に至らしめる原因となる毒を防ぐ手立ては、今ここにはなかつた。深く突き刺さつた矢が、あらゆる応急処置の可能性を阻んだのだ。

「お前の気持ちはありがたいが、もう手遅れだ。いっそ、足を切り落とすとも思つたが、足の付け根から斬るのでは、死ぬ原因が変わるものでな」

たつた一人、しかも傷を負つた本人だけでそれが可能として、ここでそんなことをすれば出血によつて死に至る。唯事でない事實を冗談のように口にした彼は、一人でくつくつと笑つた。

「しかし、お前、なんという眼をしてゐるのだ」

彼は首だけを動かし少年を見つめた。もはや自分の死を悟った彼の眼は少年の心を見抜いているか様であつた。

「お前の澄んだ瞳は無垢なようでいて違う。獸のようだな、ただ生きているだけだ。池の底を突けば池の水は濁る。流れても澄んでいる清流とは違う。お前の瞳は何事かを為せば濁るかもしない。しかし、或いは清流かもしない」

死を目前にした男の言葉に、少年は耳を傾け続けた。それが礼儀かもしぬないとthoughtたからだろうか。ただ、少年は彼の言葉から逃れられないような気がした。

「どうした。何もお前は生きる^{しゆくへる}標を持たないのか？」

問い掛けた後で、彼は続きをやめ首を振った。

「すまんな少年。意識が混濁してきて変なことを俺は口走っているようだ」

「いや」「気にしていい、という意を少年は短く示した。「あんたの言ひとおり、おれには何もない。故郷から逃げ出して、意味もなく生きてる」

故郷、その呼び名があそこに相応しいかは解らないが、生まれ育つた場所には違いない。

「そうか……少年、お前の名は？」

「ロジー」

「ではロジー、お前に生きる標を与えてやろう。俺の名を継げ。我が名ルセカーラーを継いで騎士となれ。そつすればちょっとは面白い人生が送れるかもしだん」

「ルセカーラークの？」

その名が放つ栄光は少年も知っていた。同い年の子供には憧れの存在だったが、少年には自分の境遇とその栄光が、夢に見る以上に遠くかけ離れたものだと知っていた。だから、彼はそういう憧憬からは背を向けていた。今、伝説の人物を目の人たりにして見れば、背にしていた心はやはり眩しいほどの憧れだったのかもしれない。

「知っていたか……俺も有名になつたものだ」

「なんで、会つたばかりのおれなんかに……」

「悪あがきさ。俺の名を聞いて震え上がる奴が結構いるものでね。

なあに、これだけ歳が違えば生命を狙われる心配もないさ」

彼はそういうと眼を閉じた。毒の苦しみは無いのか、彼の呼吸は穏やかであった。

「もうすぐ俺は死ぬ。答えはその後でもいい。決めたら俺の剣を持つていけ。それが証に

なる……最期に、お前に遇えた偶然を感謝しているよ

静かな呼吸は次第に聞き取れなくなり、少年の耳には雨音が広がつていった。

樹林の葉を打つ雨音だけが、その時そこにあるすべてだった。

雄弁ではなかつたが、新しきルセカーはワーズに彼の最期を語つた。ワーズは感情を隠してしまつたが、胸のうちは容易く悟れる。彼はルセカーに、伯爵へ連絡を待つよとにと伝言を言付けて席を立つた。

酒場を出ると、すつかり日は晩くれていた。雲が流れているのか、空に星はない。手綱を引いてとぼとぼと歩くるルセカーに、石畳を叩く蹄の音だけが聞こえた。煩わしくて、馬の背に跨がるより、そつやつて歩きたい気分だつた。

哀しい。人の哀しい心に触れて、自分も哀しい。

ふと少年は、騎士に出逢つたことの意味を考える。彼がたとえ気紛れにでも引き継がせたその名と、それが与える何か。古きルセカ一が新しきルセカーの辿る道筋に与えた標は、大きく彼の運命を揺さ振つている。今はそう見えなくとも、いつかその影響の大きさに気づくだろう。少年が、たとえ今、気紛れで騎士を目標していたとしても。

半ば放心していたのだろう。どこをどう歩いたか覚えが無かつた。ふと我に返つたルセカーは、自分が王都の道筋に疎いことを確認した。どこにも見覚えのある景色がない。サークスの王都に来てから歩いたところは狭い範囲に限られる。従者生活が始まつてからも、屋敷と王城の往復がほとんどで、行動範囲は狭くなるばかりだ。景色に記憶がなければ、残るは方向感覚だけが頼りだが、無意識に暗闇を歩いてしまつたせいで、はつきりとは向かうべき進路が見いだせなくなつていた。まあ、旅の途中で迷うような野垂れ死にの恐怖はない。呼べば人の居る街のなかなのだから。屋敷へも、王城まで歩けば時間は掛かるが帰れるだろう。旅の危険を考えれば、人が造り上げた空間は安全を保障された快適な場所であつた。そのはずであつた。

迷い足の行く先を決めて一步踏み出したその時だった。死の危険が風鳴りをたててルセカーオの耳元の空気を突き破つた。背後から突き抜けたそれは、遙か先の石畳に火花を咲かせて滑り落ちた。一瞬、ぎょっとして硬直する。ルセカーオは、自分が今あまりにも無防備な状態で死の危機をやり過ごしたか知ったのだ。わずか一步、わずかだが、それによる移動分がルセカーオの身を死の領域から脱しさせてくれた。そのときルセカーオが頼つたのは、ただ運のみ。幸運という御し得ない事象が、彼を狙つた矢から彼を救つたのだった。

一瞬の硬直から立直つてルセカーオは振り返る。だが、背後の街並に射手の姿は見て取れない。おそらく、弩による遠距離射撃だ。ルセカーオは手綱を引いて走つた。なるべく馬を背にする位置で射線を避ける。射手の正確な位置が掴めない状況で、効果の程は疑問だが、そうして逃げるより他なかつた。

周囲に目を配つてみる。ひと気は無く助けの当てはない。どのみちルセカーオには大声を出して助けを呼ぶ、という発想が欠けていた。長らく一人旅で、人に頼ることをしなかつたせいだ。それは立派に聞こえるが、この場合は助かる可能性の何割かを捨て去る愚でしかなかつた。誰に頼れというのだ。彼は反論するかもしれないが、たとえば大声のひとつも出せば、人目に付くのを避けて射手は逃れるかもしれない。

狩人が狙う獲物のようにルセカーオは逃げ、おそらく背後から獲物を狙う狩人のように、刺客は迫つていた。

獲物を追い詰める第二射が風音をたてる。矢がルセカーオの二の腕を掠めて過ぎ去つた。皮膚と表面の肉がすっぱりと裂けて、神経に熱い痛みを走らせる。それを堪えて街路の角を曲がると、ルセカーオは馬に飛び乗つて腹を蹴つた。乗り手の意を汲んで、猛然と栗毛は駆けた。曲がつた角が背後に遠くなつていくのを確認して、ルセカーオが安堵の息を吐いたのも束の間、その角を、石畳を叩く馬蹄が追いつがつた。

ルセカーオは冷汗が吹き出るのを感じた。射線に背中を晒している

のだ。

追つ手の方は苛立つてゐるに違ひなかつた。必殺を機した一射目を偶然によつて阻まれ、一射は小賢しくも馬体に遮られてままならなかつた。追つ手が三射目を放つ。薄暗い景色が風音とともに後ろへ轟々と流れるなか、弩の矢だけが景色の奔流を逆流して迫つてくる。が、馬上からの狙いは幸いにもルセカーオの頭上に逸れた。後ろ髪が逆立つ。ルセカーオは肩越しに振り返つた。刺客が剣を抜き放つのが目に入る。矢が尽きたようであつた。もともと弩は強力な威力の代償として、矢を番えるのに労力を要する。その為、連射はできないのだ。この刺客は弦を三段に張つた三連射の特殊なものを使つたに違いない。ルセカーオにはそこまで気を回す余裕はなかつたが。射手は矢が尽きたにもかかわらず、追走をやめなかつた。馬足は互角で、差は縮まる事はなかつたが、広がりもしなかつた。こうなると、先に馬が根を擧げた方の負けである。生命を狙われる側としては、より確実に安全圏へ逃れる方策を模索する必要があつた。

大きな街路へ出る、その角をもう一度曲がり、更にもう一度。ルセカーオはそこで馬上から物陰へ飛び降りた。石畳に叩きつけられ転がりながら、素早く身を隠して気配を殺す。

数秒後、ルセカーオが身を潜めた軒下の樽の前を追つ手が行き過ぎた。馬脚を緩めなかつたところを見ると、どうやら気づかれずに済んだようであつた。ルセカーオの乗馬は、すぐ先の繁華街に飛び出し、ちょっとした騒ぎを巻き起こしていたが、乗り手の方は関知し得ざる出来事だつた。

ルセカーオは左胸のなかで暴れる心臓と、荒くなる呼吸を抑えて息を潜めた。

追跡者が舞い戻つてくる気配はない。

ルセカーオは息を殺したまま、その場を立つた。

と、壁に手を突いた腕に熱痛が走つた。矢が掠めた切傷だ。ルセカーオは傷口をおさえ、かつてのルセカーオの死因に思い当つてぞつとした。

(毒…………！？)

傷自体は深くない。だが、毒ならば、それは関係ない。ルセカ一
は傷口から血を吸いだして吐き出した。

足元がふらつく。気が抜けたのか、それとも、やはり矢に毒が塗
られていたのか。

ルセカ一は暗がりへと逃げた。どこか安全なところへ。闇に身を
隠す獣のように。

路地裏から路地裏へ。どこをどう巡ったのか。朦朧として意識と
記憶が飛ぶ。

光のある場所が、ルセカ一の目に眩しく映つた。路地裏の隙間
から見える暖かい場所。人がいる。いて欲しい。家族、友人、恋人、
呼び名はなんでもいい。待っている人が。

光のある場所。そこへ還りたい一心で、少年は力を振り絞つて
歩いた。

故郷、その呼び名があそこに相応しいかは解らないが、生まれ育つた場所には違いない。

少年は、その小さな町の娼館で育つた。その町は小さいが、周辺には開拓者たちの村落が点在し、近郊には太守の住まう大きな街もあつた。多少の距離が、忍んで足を運ぶ種類の客に好まれて、また美しい女たちを多く抱える店との評判が、街の男たちを誘つた。

少年は孤児だった。いや、本当はそうでないかもしない。娼館の女主人はそうと言わなかつたが、娼館の女たちの中に、少年の母親がいることは暗に知れた。

娼館で、少年の居場所といえば、屋根裏の自分の部屋だった。その上に立つと天井に頭をぶつける寝台。壁の真ん中にある、大きさだけが自慢の窓。低い天井は、成長期になると窮屈な感じがした。夜、それは女たちの仕事の時間。その間、少年は階下に降りることを禁じられる。幼な子ならともかく、寝入るには早すぎて退屈な時間。窓辺にしゃがんで、月明かりの景色をぼんやりと眺めるか、それともこつそり抜け出して夜の散策に出掛けるか。夜の過ごし方は、どちらかに決まつていた。

「ロジー、そんなところでうたた寝したら風邪ひくよ?」

その日は窓辺にいた。月がとても明るくて、外がはっきりと見える。波打つ丘陵、地平の彼方の小さな山影。群れからはぐれた小さな雲が、青白く照らされて無音に漂つてゐる。でも、何時間も見てゐるには、やつぱり退屈な景色だつた。

うわいとを呴いて、うつづへと舞い戻ると、ロジーは口からこぼれた液体を拭つた。

「トリス?」

少年は、夢とうつつの狭間から彼を引き戻した声の主を振り返った。彼女は、下の階から梯子を昇つて腰から上を覗かせていた。床から突き出た梯子の先に腕を掛けて、くすくすとした笑みを浮かべている。茶色の髪を結い上げて大人びた印象を作っているが、年のはまだ十六、七の娘だ。

「よだれ、白くなってるみたいよ？」

寝ぼけ眼ねぼまなこを擦つたロジーは、今度は頬ほおを撫で付けた。

トリスは屋根裏へ昇りきると、ロジーに近付いて少年の頬の汚れを確かめた。彼女の手がロジーの頬を包んで見つめている。もう片方の手は、ハンカチでいささか遠慮なく彼のほっぺたを擦りつけていた。

吐息が肌に感じられるくらい、彼女の顔が近い。眼を逸らすと、肩の広く開いたドレスの胸元が眼に飛び込む。顔をそっぽ向かせないかぎり、少年の視界は彼女で一杯だった。

ロジーは少し顔を赤くして顔を引いた。

トリスが顔を曇らせる。

「ごめん、私、香水くさいね」

仕事の時は、化粧も厚いし香水もたっぷり振りまく。そんな色香に騙される馬鹿な男が商売の相手なのだ。

ロジーが顔を引いた訳を誤解した彼女は、そういうって謝った。

「トリスはトリスだよ！」

大きな声の主張に、トリスは眼を丸くした。そのあと、色香を放つ化粧と衣装に不似合いなほど無邪気な笑顔を花咲かせた。

「ありがと。じゃ、私は仕事に戻るから、もうお寝みなさい」

彼女が去つた部屋は、まるで灯りが消えたようだった。彼女という音楽が鳴りやんだ様だった。

本当は仕事になんて戻らせたくなかつた。トリスの腕をつかまえて引き止めたかつた。でもそんな資格も力もなかつた。彼女たちの力で、ロジーは養われてきたのだ。そして、こうしなければ生きていけなかつた彼女たちだ。

一度だけ、トリスの仕事を窓の外から覗き見た事がある。

相手は、人目を忍んでやつてきた高い身分の男だった。

脂ぎった顔が厭らしい笑みを浮かべて、トリスの白い肌を撫でまわす。トリスがそれを拒絶する事無く受け入れて喘ぐ様を、ロジーは目のあたりにした。

叫びだしたくて、それを我慢すると喉を搔きむしりそうになった。そして、醜い贋肉をかぶった男の身体に抱きかかえられたトリスの瞳と、目が合った。驚きに見開かれる彼女の瞳。自分がどんな顔をしたか分からなかつた。ロジーは、その場から逃げ出していた。

「あのブ男がどれだけの上客か分かつてることなんだかい？ どんなにデブでも、肥えられるだけの金持ちってことなんだからね。なにがあつたか知らないけど、こんなことは一度にしておくれよ、トリス」戸口から、灯りとともに女将のラチカの声が洩れだしていた。夜中の町を、とぼとぼと歩き回つて帰りついた時だつた。扉の陰で、館の女たちが中の様子を窺つていた。

「どうしたの？」

「トリスが、お客様の相手をしている最中に、急に嫌だつて騒ぎだしたらしくてねえ。ラチカがおかんむりなのよ」

女の一人がロジーにそう教えた。

「ちょっとあんた！ 子供に余計なこと言わないの！」

年長の娼婦がその女を叱つた。

彼女が叱るのは、十三になつたロジーなら分かることだった。

話を終えてトリスがこちらへ向かつてくると、女たちは蜘蛛の子を散らすように部屋へ戻つた。ロジーだけが、そこにとり残された。何か言わなくては、そう思つたのに、沈んだトリスの瞳に自分の姿が映つたとき、ロジーは居たたまれなくなつて自分の部屋へ階段を駆け上がつていた。

背中のトリスは何も言わなかつた。けれど、哀しげな瞳が自分の背を追つているようで。

暗い部屋に、ロジーは閉じこもつた。朝になつても、下に降りず

に朝食も採らなかつた。その日の朝食はアンナの番で、彼女が呼びにきたけれども、ロジーは出入口の床板を開けなかつた。一度呼びにきただけで、あとは誰もこない。女将がそうさせているのだろう。「食欲がないなんて贅沢者に、喰わせる飯はないよ」それが彼女の口癖だ。

別にいい。誰の顔も見たくない。いや、来て欲しかつた。少年のほんとうの心は、そう言つていた。トリスと話がしたかつた。

こんなとき、トリスはからなづ来てくれる。でも、今度は来てくれるだらうか。傷ついたのは、少年よりきっと少女の方だ。

それでも、やっぱり彼女は来てくれた。

「ロジー？」

床板を小さく叩いて掛ける呼び声は、意外なほどに明るく、そしてこれからいたずらを始める子供のようにこつそりと、少年を呼んだ。

「開いてるよ」 そう返事を返した。もともと鍵なんてないし、その代わりにのせておいた重しも、自分が馬鹿馬鹿しくなつて片付けておいた。トリスがきっとくるから、そう思つた自分の甘えもまた、恥ずかしかつたが。

「ことんと戸」が開いて、トリスが顔を覗かせた。

「ロジー、お腹すいたでしょ。お昼をこいつそりお弁当にしたから、外に出掛けと一緒に食べましよう？」

承諾の返事が喉につかえて、代わりにこぐれとロジーは頷いた。外はいい天氣で、屋根裏部屋に立て籠るのはもつた日だ。「どこにしようか？ そうだ、川べりに行こう？ 眺めもいいしきつと気持ちいいわ」

トリスの明るさに引っ張られて川べりに向かつて歩くと、やがて彼女の言つとおりの景色が広がつた。

野っぱらに、石ころが転がつた小川。彼方の山並みはいつもよりはっきりとした輪郭で、遠くの森では鹿がこちらを覗いていそうだ。あの森へ踏みいると彼方に見える山へと至る。それを越えたら、

どんな国だらう。どんな土地があつて、どんな人たちがどんな生活を送つているのだろう。

ロジーの胸は思いを馳せ、想像の中ではそれは現実となり胸を熱くした。でもその現実は胸の内だけの現実で、だから達成されたのは満たされて熱くなつた胸だけだ。それもすぐ空虚に変わる。あの森へ踏みいり、彼方の山を越えれば、彼女は自由になれるだろうか。

「ロジー、どうしたの？」

トリスが驚いたように駆け寄ってきた。

目に熱いものが溢れて頬を濡らしているのは判つていた。

胸が熱い。満たされているからじゃなくて、満たされない思いが悔しいと叫び声をあげているから。満たされないものを満たすことが、自分には叶わないことを知つているから。諦めとは違う。望みに對して、自分のあまりの無力さが、ただ悔しい。

自分の力で叶えられないことを彼女にぶつけるのはただの我が儘だと知つてゐるから、それは言えない。

「…………オレ、トリスのこと好きだ」

そう言つだけ。それが精一杯だ。

トリスの顔が曇つた。少年の言葉が嫌だからじゃない。

ロジーは我慢強い子だ。この少年が涙するのに、どれほどの強い思いがあるだらう。

一言だけ言つて、あとは歯を食いしばつて前を見つめる瞳。その言葉に、どれほどの思いが込められているのだろうか。

「男の子つて、素敵ね」

ふつと、彼女が顔を寄せて、その唇がロジーのに重なる。

「ありがとう、私を好きでいてくれて」

「でも、私はあなたに嫌なところばかり見せちゃう。こんな生き方をしていれば自業自得。仕方ないよね……」

三章 望郷と、焦燥（後書き）

最近、コメントを頂くことが増えました。皆さんありがとうございます。今後もがんばります。

トリスとの別れは、知らぬうちに忍び寄っていた。

それは夏の近いあの日。

彼女に口をかけた高貴な身分の人物が、彼女を愛妾に迎えたいと使者を寄越したのだ。

使者は前金を持参し、後日その三倍の額を支払うという主人の意向を伝えた。

いわゆる身請け、体裁はどうあれ彼女は売られるのだ。

話を聞いたロジーは震えていた。娼館にとつても、トリスにとつても悪い話ではない。そして決定は女将の意思次第で、彼女がそうと決めればトリスの意思も、ましてやロジーの口など挿む余地もない。彼女は行ってしまう。どうしようもなく、それは決まったことなのであった。

その夜、トリスの部屋の戸をロジーは叩いた。

夜更けの来訪を告げられたトリスは、そつと扉を開いた。来訪者がロジーであることは察しがついていたようだ。

「ロジー、お入りなさい」

立ち尽くして何も告げないロジーを、彼女は部屋に招き入れた。トリスはロジーをベッドに座らせ、自分はテーブルに腰をすがらせて少年を見つめた。

彼女は何かを言おうとして口を開き、それを言葉にするのを試みて、はにかむと首を振つて諦めた。

無言の間を先に破つたのはロジーだった。

「…………行くのか？」

「ロジー、一緒に逃げよう、どこか遠くへ行つて暮らしましょう。二人なら、苦労してもどうにでもやつていける」

ルセカーは、そこで違和感を覚えはじめた。彼女はそんなことは言わなかつた。これは自分が望んだ夢なのだ、と。

夢のなかの彼女は、自分を搔き抱いて、耳元に何ごとかを呴いた。それは愛の囁きだったような気がしたけれども、やはり夢だ。何も思い出せない。

「……トリス」

熱にうなされたルセカーラの額の汗を、シースティアはそつと拭った。

「シースティア様、どうですか？ 様子は？」

水差しを手にした少女が、ランプの灯りだけの薄暗い部屋に入ってきた。かつてのシースティアの従者エレの友人だ。名前はルーヤという。ルセカーラを怒鳴りつけたあの少女だ。

シースティアは、彼女のことを記憶していた。女性騎士として、女の騎士見習い従者のことはだいたい耳に入つてくる。なにより彼女はエレの友達としての面識もあつた。

「まだなんとも。うなされているみたい」

静かにシースは言った。

「毒を使うなんて、卑怯だ」

ルーヤはシースの横に腰掛けると、祈るように手を組んだ。

「そう……そうね」

生きるか死ぬか、それを突き詰めていけば、どんな手段も忌避することのない非情さを知る剣士としてのシースが、今はルーヤの言葉に頷いて、彼女の肩を抱いた。

二人の胸には、共通の人物の死が影を落としていた。

騎士団は王城の外にも施設を幾つか持つている。ルーヤが住む女子従者寄宿舎もそのひとつで、民間から借り受けた四階建ての建物に、騎士団に所属する女子従者のほぼ全員が寄宿していた。

騎士たちは、ある一線では男女の別には頓着しない。戦場では当然のごとく無視される事柄であるからだ。一方で、平時の女子たちは、女らしくあることを、女社会の団結と暗黙の規律を互いに

肌で感じることで、或いは無礼な男どもに感じさせることで守つて
いたが、寄宿舎が外部にあることについては、単に騎士団の敷地が
足りなくなつたといつ一點が、その理由であつた。

「ルーヤ」

夜更け。戸締まりの見回りに歩いていたルーヤを、暗がりから誰かが呼び止めた。

「あの男の子の具合、どう?」

手に持つカンテラの灯りを差し向けると、ルーヤと同年代の少女たちが階段のなかほどから彼女を見下ろしていた。

買い出しに市へ出掛けたルーヤが、傷を負つて倒れた少年を運び込んで、寄宿舎はちょっとした騒ぎになつた。

ルーヤは野次馬と人手の区別をつけ、借りるべき手はきちんと借りて、彼女ら同僚たちには引きとつてもらつたが、彼女らにしても気になるのは理解できることだ。

「今、シースティア様が見てらっしゃるわ。熱がひどくて、わからな

ない」

「そう……」

「さ、早く部屋に帰んなさい。風邪ひくわよ」

夜着に肩掛けショールという彼女らの薄着をルーヤは見咎めた。

「う、うん

彼女らが階段を振り返つて昇りはじめのを確認してから、ルーヤがその場を立ち去るふとしたその時だ。今しお、鍵を閉めたばかりの玄関の扉の外で、銅製のノッカーが鳴つた。

夜は深まり、その闇は深淵に差し掛る時分。

ルーヤは扉を凝視して硬直した。

静寂が不気味さを漂わせて、ルーヤの胸中に刃をあてられたような圧迫感を与えた。

やがて、無機的なノックがもういちど扉を鳴らす。

ルーヤは懐剣を確かめると、戸口にカンテラを掛け、後ろ手に抜き身の懐剣を隠して扉の鍵を開ける。ルーヤは息を飲んで戸を開い

た。

「夜分失礼するよ。君はルーヤ、だつたね」

細く開いた扉から、優しげな細面が覗いた。

「ソール・デレフ伯爵閣下！」

白が混じりの茶色の髪は、少し乱れていた。馬を飛ばしてやつてきたのだろう。

「話は聞いた。ルセカ一を救つてくれてありがとう、ルーヤ」

ルーヤは恐縮した。エレを訪ねて伯爵家に一度行つたきりの、従者ごときの名前を覚えていて、それどころか頭まで下げられたのだ。どれほどエレといつう少女が大事にされていたかが分かる。

「閣下、礼などおっしゃられるには及びません。それにまだ容体は……」

そこでルーヤは、はつと手にした懐剣に氣づいて、慌てて鞘に収めた。

「氣を張り詰めていたようだね。周囲を私の配下の騎士が守つているから、少し氣を緩めて休みなさい」

「はい……でもシースティア様が……」

「娘には私から休むように言つておく。さあ」

「では、部屋にご案内してから、少しだけ休ませて頂きます」

いつのまにか、眠つてしまつていたようだつた。意識が覚醒するとい、目を離している隙に悪いことが起こつたのではないか、そんな嫌な想像に駆られて恐くなる。そんなときは、まだ熱で苦しそうだけれども、乱れた呼吸でさえ安心させてくれる。

シースは、ルセカ一の額にあてられた布を桶の水でしぼり直した。

「様子はどうだね」

その声に、シースは驚いたように振り向いたが、しかしその驚きはすぐに些末事として彼女の心からしほんで消えた。

シースは訪れた父親に首を横に振つた。

「医者はなんと？」

「……運が良ければ見込みはあるだけ」

「そつか」

「でも！あの娘の時もそつだつた、医者はやつぱり運が良ければ助かる。でも結局、薬は効かなかつた！」

「シースティア……」

伯爵は我が子を抱き締めた。

夜半に降りだした雨は、王都の街並を静寂で塗り込めた。闇と驟雨に閉ざされた街には、何かよからぬものが徘徊している様で不気味だつた。

「こんなときに嫌な雨……」

自室の窓辺に立つルーヤは、室温によらぬ寒氣を感じて肩掛けを引き寄せた。

灯を落とした部屋は暗く、外の闇と室内の闇に挟まれた壁だけが、彼女が手をついた壁だけが、自分の拠り所であるように彼女には感じられた。

ルーヤが目にする窓硝子は雨水に淀んで歪んでいて、といひどころにビニカの家屋の窓から漏れる灯りだけが目に写つた。

敬愛するシースティアに任せ切りで、眠れる筈もなかつた。

会つていきなり口喧嘩した少年だけど、助かると良い。ルーヤはそう思つていた。もう、あんな思いはたくさんだ。

その時、見るとはなしに見ていた窓の外を、ふと何かが横切つたような気がした。

ルーヤは目を疑つた。確かにいま、黒塗りの景色にぽつりぽつりとある灯りの点を、何かが遮つたのだ。しかし、ここは四階だ。一体何が横切るというのだ。ルーヤは息を飲んで窓の外を凝視したが、目に見える変化はない。ルーヤは窓を開けて確かめようか、迷つた。窓の掛け金に、おそるおそる手が伸びる。

「…………」

ルーヤは伸ばした手を、しかし途中で降ろして窓を開けるのをやめた。たぶん、気のせいだ。

用心深い彼女が、この時はなぜかそう思つた。いや、そう思おうとした。それは彼女の本能の為せるわざなのか。この時、それは彼女にとつて幸運だった。

少し風が出てきた。雨音がはじめたのは気づいていたが、窓硝子が風に叩かれたので、やや荒れ模様になつたのだろう。

シーズは椅子から離れて窓辺に寄つた。隙間から、吹き荒ぶ風が押し入るうつと音を鳴らしている。

腰にある剣を、シーズは確かめた。

「誰です、そこにいるのは？」

振り返つたシーズは戸口を突き通すように視線を送つた。しかし、気配の所在には微かにずれがある。

その瞬間、燃え盛る暖炉が、ボウッ、という音とともに煙を吐いた。

シーズは目を見張つた。一瞬にして暖炉の火は消えた。が、そこから燃え移つた炎に身を焼きながら、黒装束の男が歩み出てきたのだ。しかも苦しみ悶えるでもなく、炎は逆に屈伏したかのように消え去つていく。それにつれ、光は闇に。部屋は暗転する。消え入る最後の火が、黒装束の男が抜き放つた半月形の短剣を光らせた。

抜き放ちざまに、短剣が襲いかかる。その太刀筋を、シーズは予測だけで受けとめた。剣を鞘から走らせるのが少しでも遅ければ、シーズの細い喉は断ち切られていただろう。咄嗟に抜いた彼女の剣は、それでもまだ半分が鞘のなかであったのだ。

部屋が完全に闇に落ちる。それでも、その一合によつて弾けた火花の残光で目に焼き付いた像を頼りに、シーズは斬撃を繰りだした。光が消えたかどうかの一瞬だ。並みの使い手ならこれで屠れただろ

う。だが、黒装束の男は一瞬の光が作り出した残像と同じ場所につまでも身を置くような簡単な相手ではなかつた。

もはや視界は完全に失われた。唯一の勝機を逃したかもしない。身を床に転がして、こちらも場所を悟られぬ様息を潜めるべきか。だが、背後にはルセカーが横たわるベッドがある。

こんなとき風の音が恨めしい。わずかな物音が生死を分けるとうのに、それを遮つて刺客の味方をする。

唯一の味方は、部屋の広さだ。幸いそれほどに広くない。壁の両側までをシースの間合いは斬り込むことができる。もはやシースは、剣気を張つて結界とするしかなかつた。そこに踏み込めば斬る。必殺の気合いだ。

集中力は時間の感覚を鈍らせるが、目が闇に慣れてきた、それほど時間を見死の瀬戸際では長いというのか短いのか。

闇に慣れてきた目の視界に、かすかに黒装束の姿が浮かび上がる。「シースティア！ 大丈夫か！」

その時、扉が開け放たれ、カンテラの光が部屋を照らした。その時ばかりは、カンテラの灯が太陽のようであった。

「お父さま！」

黒装束は、引き際とみるや暖炉に飛び込んだ。何か火種を残したのか、再び暖炉が燃え上がり追跡を断つた。

「屋根だ！」

伯爵は従えていた騎士に命じた。二人の騎士がとつて返す。

「二人では駄目だ。数を揃えて追え！」

外では彼に仕える騎士が警護に当たつてゐるはずだ。呼べば十名ほどが集まるだろう。

「シースティア様、ご無事ですか！？」

「ルーヤ、あなたが報せてくれたの？」

「うむ、この子のおかげだ。私たちは見当違いの場所を守つていたようだ」

間一髪の危機に間に合つて、伯爵は安堵の息を吐いた。

外を見回っていた伯爵の髪と服は雨でびっしょりだ。

ルーヤは、やはり自分の感性を無視できなくなつて人を呼びにいつたのだ。そしてあわやの所でシースを救つたのであつた。

「ありがとう、ルーヤ」

ルセカーが意識を取り戻したのは、それから数時間後のことである。

病気をしたとき、まわりの人間が優しくしてくれた経験は、たいていの人間が持っているもので、母親が誰か分からぬルセカーにも覚えがあった。

流行りの病気で熱を出した時がそうだ。一週間寝たきりで、ト里斯や娼館の女たちが、献身的に世話をしてくれた。

使用人である今、そんな扱いを願つてなどいなかつた身に、思ひがけず氣を遣つてくれる人たちがいて、ルセカーは少し困惑した。意識が戻つて、ソール・デレフ邸に戻るまでのあいだ、面倒を見てくれたのは口喧嘩の相手だったルーヤだった。

目は覚めたものの、身体はまったくといつていいほど動かず、そのままルーヤたちの宿舎を使うことになった。

「ほら、食事よ」

シチューをすくつたスプーンが、ルセカーの口元に差し出されると、ルセカーは無言で口をひらき、ルーヤはスプーンを突っこむ。「なんか、氣味悪いな、お前に優しくされると」

「動けないくせに口だけは減らないわね」

ルーヤは口をへの字にして咳いた。そういう態度とると食べさせてあげないわよ？ と、言つてはみても、やはり動けないルセカーの具合は見ていて辛そうで、ルーヤは甲斐甲斐しく世話を焼いた。三日ほどたつて、ルセカーの回復の度合いをみてソール・デレフ邸に戻すことになった。

屋敷に戻るときは、まだふらつく身体をシースティアが手すから支えてくれた。

迎えの馬車は車内に寝床をしつらえてあり、旅のさなかに土のうえを寝床にしていたルセカーにはたいそうな贅沢に感じられた。

枕を背にして、すこし身を起こしたルセカーは、足元の毛布の裾をなおすシースをぼんやり見つめた。まだ熱っぽくて、論理的な思

考はなされていなかつたのだけれど、熱の具合いを確かめるシースの手のひらに触れられて、胸のうちがざざめくのはわかつた。

「熱でつらい？」

寝着のしたで、身体が汗ばむのを感じる。ルセカーは小さく首を振つて眼を閉じた。

……トリスみたいだ……。

「なにか言つた？……」「

シースは聞き返したが、ルセカーから返つてくるのは安心した寝息の音だけだつた。

ルセカーが病床にあるあいだ、シースは一人で出仕することになる。屋敷の寝台の上でルセカーは気を揉んだ。

朝きちんと起きて、遅刻などしないだらうか。彼女は出掛けの前、帰つたとき、必ず顔を見せる。だが明日は？ ちゃんと無事にシースは帰つてくるだらうか。暗殺者は、いつか必ず彼女を狙う。そうに違ひない。そんな心配をして、彼女の帰りが遅いと自分の世話をしてくれる侍女に、それとなくシースの所在を訊いてしまつ。あくまでそれとなく、だけれども、それがルセカーの急性心配症から発しているのは見え透いていた。

「シースティア様のことを心配しているのね」

ルセカーと年の近い、クレアというその侍女は、そういうて微笑んだ。

「べ、べつに……当たり前だろ、俺、いちおうシースの従者なんだから」

「うん。ありがとう、シースティア様のことを心配してくれて。私たちも、とても心配しているの」 クレアは、ルセカーがたいらげた夕食を片付ける手をとめて言った。「こうして悪いことが続くと、とても不安だから……」

富廷騎士シースティア・ラ・ソールには、顔が利く馴染みの店がいくつかあった。

それらは、彼女の仕事の役に立つたし、個人的にその店を利用することもあった。

「いらっしゃい」

老人の落ち着いた声が彼女を出迎えた。小柄で、人のよさそうな老人だ。頭髪は禿上がつていない代わりに真っ白だ。人柄が店の雰囲気があらわれているようで、綺麗に整頓された店は老人の丁寧な仕事を思わせる。

壁にしつらえた棚には、道具類やちょっとした薬品類が並べられていて、一見なんの店かは検討がつきかねる装いだが、無論シースには勝手が知っていた。

「やあシースティア、仕事かね」

「いえ、仕事ではないんだけれど、個人的に調べてほしいものがあるの」

「ほう」

老人は興味深げに、しわに引っ掛けられたような眼鏡を掛けなおした。

シースは老人の興味を得たのを確認して、手についていた棒状の包みを広げた。中から出てきたのは剣だ。長剣にしてはやや小振りだが肉厚があり、存在感が強い剣である。それはまさに、彼女が彼女の従者から預かった剣であった。

「ほほう、これはたいしたものだ」

シースから剣を受け取った老人は、両手で鋼の身を掲げて見入った。

柄から伸びる刃は手元で鈎状に拡がって幅広になり、切っ先に向かつて緩やかに細り、腕ほど長さで剣先へ曲線を描いて絞られていた。柄飾りは、鈎状になった刃の付け根に対応して拡がった細工がなされているが、これは柄飾りと刃の間に相手の剣を絡めとつて碎

くという実用的な用途が与えられているようだ。

「これは、良い剣じゃな」

老人は一言で誉めた。シースは老人の講釈を聞いたことがあるが、それによる良い剣とは、長さと重量、それらのバランスを評価の基準としているものらしい。もちろん、素材や硬度などはまた別の話だ。熟練した使い手として、同感だった。

ひととおり見るべき所を押さえた老人は、眼鏡のレンズの間から上田遣いに田線を上げた。

「その剣、すこし調べてほしいの」

「ほう」

老人はこともなげに言つと、もういちど剣を見た。今度はたてに掲げてみる。

「よろしい、預かるづ。」これほどの剣なら、鍛冶匠や武器商人をあたれば、出所が分かるかもしれない。調べるのはその類のことであんじやう?

「ええ。でも、その剣は私にとつても預かり物だから、その事は忘れないで」

「あなたの信頼は裏切らんよ」

老人は言った。人間の言葉が持つ重さは、それを発するものによつて異なる。時に一枚の紙片に記された文字よりも軽視されるが、シースは老人を信用した。

「ことさら暗くなるのを待つて帰宅しているわけではない。ただ、宮廷騎士としての仕事が終わるのを、時刻が待つてくれないだけなのだ。そして、シースティアは暗闇を怖れるより、そこに身を浸して再び邂逅するのを心待ちにしている節があった。あの日、エレの命を奪つたあの暗殺者と。

夜道をゆくとき、シースは暗闇に黒く猛々しい憎悪の心を曝け出す。闇があの時の記憶を否応なく彼女の脳裏から引き出すからだ。

思えばこここの所、そんなどす黒い感情が自分の胸中を支配することはなかつた。それはあの少年がいてくれたからであろうか。だが、その少年も、傷つき動けないでいる。それは、いつたい誰のせいか。「ここあなた。先刻から私の後をつけているようですが、早く用件を済ませてはどうですか？」

シースは馬を止めて降りた。本氣の斬り合いになれば、馬上は不利になる。逃げるつもりはない。エレが死んで、ルセカーが狙われた。相手の意図は分からぬが、素性を明かさぬなら敵と見做しても間違ひはない。これ以上、身内を危険にさらすわけにはいかないのだ。

シースは剣を抜いた。白くきらめく刀身は、シースの炎えあがる双眸とあいまつて美しかつた。

返答はない。ならば。シースは気配が潜む暗がり日掛けて駆けた。相手に動搖が走つたのが氣取られた。完璧に身を隠していたつもりだつたのだろうが、シースは過たず、そこを日掛けで間合いを詰めたのだ。

シースの白刃が気配の潜む物陰を襲う。気配の主は慌てて飛びしさつた。隠れみのに使つていた樽が、すっぱりと刃の通つた筋道どおりの断面をつくつた。

「ま……待てッ！」

潜んでいた男はシースティアを制止したが、彼女は止まらなかつた。立て続けの斬撃が男を襲う。男は大柄な体躯に似合わず、素早い身のこなしで躊躇つたが、シースが間合いを詰める迅さがそれを上回り、男はついに剣を抜いて受けた。

「待て！俺は…………！」

男は弁明を試みたが、シースは息をつかせなかつた。

右！ 左！ 切り返しの迅い剣が男を守勢に押しやる。いずれ、必殺を狙う一撃がくるはず。それを読めて、流れを返せない。そして、来た！ 男の左胸を貫く軌道で、白刃は突きを閃かせた。その刹那、男はほぼ同時に突きを繰り出した。シースの突きの動作を目

で見てからでは遅い。彼女の拳動、必殺の氣を察知してこそその技だ。そしてその技はそれだけにとどまらない。男は己が剣の柄飾りでシースの切つ先を受け、また自分の剣の切つ先をシースの剣の柄飾りに噛ませた。これで、会話するだけの余裕が一人の間に持てるわけだ。

男の技量は驚嘆に値した。シースの剣は神速である。それをこれほどまでに精緻な技で防ぐとは。シースは、心理のうちにかすかな敗北感が漂うのを覚えずにはいられなかつた。

「落ち着け。俺はワーズ・ワスマイル。あんたのお父上とは盟友の仲だ」

男は名乗つた。ルセカーと会つた時の農夫姿とはまるで違つ、本來の剣士の姿だ。

その時、初めてワーズは気づいた。シースの呼吸は荒々しい。恐怖のせいではない。それほどまでに、“敵”に対する殺意を体内に充满させていたのだ。

獸のように油断なく光るシースティアの眼に、ワーズはぞくりとした。

3 (後書き)

携帯でも閲覧可能です。
よろしければ、ご利用ください。

その夜、ルセカーやは目を覚ました。身体の調子はずいぶん良くなつた。でも体中の力が抜けてしまつたようで、完調ともいえない。いつかのように、夜半に目が覚めてしまつたようだ。邸内は静かで、あらゆる気配が寝静まつていて。身の回りの世話をしてくれているクレアも、ルセカーやが寝付いたので引きあげたようだ。

身体は、眠りから覚めるたびに回復しているのが分かる。手足が動くので、そろそろおとなしく寝てはいられなくなってきた。ルセカーやは、体を起こして寝台の横に座つてみた。頭がふらついたりしないのを確認してから、裸足の足を床に踏みしめて立ち上がる。意外と平氣だ。

ルセカーやは扉を静かに開けて廊下を覗いた。

寝静まつてゐる、そう思えたはずだが、廊下の一番奥の伯爵の居間から明かりが洩れでいる。少し興味がわいて、ルセカーやの足はそちらに向いた。

「…………ギゼ」は、この件に関して手を引くつもりはない。が、かなりやばい橋を渡つてゐる事も理解してほしい。もしかすると、殺された連絡役の口から、足がついたかもしけん」

明かりが洩れる隙間をルセカーやは覗いた。円いテーブルの椅子に座る伯爵が見える。声の主は席を立つてゐる様で、向き合つた椅子には誰も座つていなかつた。

「ところで伯爵、ルセカーやは無事か?」

ルセカーやはどきりとした。鼓動が迅くなつて息苦しくなる。呼吸の音が気取られはしないかと不安になつた。

「やはり気になるかね? ギゼは

優しげな声色に、だが抜け目の無さがその言葉にはあつた。

「意地の悪いことを言いなさんな。ルセカーやのことを教えてくれたのはあんただ

自分が話題となれば、立てた聞き耳にいつそう集中する。と、暗やみに潜むルセカーロ元を、何者かがふさいだ。

驚きはあつた。だが恐怖は感じるまもなく、その必要を打ち消された。口をふさぐ、少しひんやりとした細い指先の手。屈んだ背に掛かる、柔かい温もりの重み。そして、耳に囁き掛けの声。間違いなく、それはシースだ。

「静かに……こっちにいらっしゃい」

暗い廊下をシースの手に引かれて歩くのは、記憶の底にある何かを呼び起こしそうであつた。その気持ちがなんなのか、いつまでも判然としないままルセカーロは歩いた。

シースは自室にルセカーロを連れていくと、椅子に座らせた。自分はテーブルを挟んで向かい側に座る。

「気分とか、悪くない？」

ルセカーロは首を縦に振った。その代わり、別の要求が腹の虫から為された。

「わかつたわ。ちょっと待つて」

シースはにこりと頬笑んで席を立つた。

灯りの少ない部屋に一人残されると、急になにかが物足りなくななる。心の狭間をすき間風がぬけている。

ルセカーロはしばらくじっと座つて青暗い闇を見つめていたけれども、ふと椅子から立ち上がり窓辺によつてみた。

思つたとおり。闇が晴れて、月明かりがそそいでいる。こうして月をみていると、どうしてこんなにも胸が痛いのだろう。

ルセカーロの胸は、いま闇夜に現われた月のように、満ち足りていなかつた。

「…………トリス

「ルセカーロ？」

どきり、トルセカーロは振り返つた。お盆を手にシースが立つてい

る。

椅子に座つて、二人は再び向かい合つた。シースが運んでくれた

のは、夕食の残りのシチューとパンだった。

小さなテーブルに並んだそれらをルセカ一が黙々と皿の中に収める間、シースはテーブルに片肘をついてじっと見守っていた。はじめはルセカ一の猛烈な食欲に目を丸くして。それから、優しく穏やかな瞳で包むように。パンの最後のひとかけらを飲み下して、その瞳に気づいたルセカ一は、仕事を終えて空いたはずの口から、なにを喋るうか悩んだ。

目の前の女は、女だてらに騎士で、素性の知れない自分に最大の保護を与えてくれる。いまもこつして、彼女は恥ずかしさで居心地が悪くなるくらいの慈愛をそいでくれていた。またか。まだ自分は、保護される側の弱い子供でしかないのか。じわりと胸の奥、感情の襞ひだから悔しさがにじみ出る。そう思つとシースの瞳を見ていられなくて、ルセカ一は俯いて顔を隠した。

「ルセカ一……？」

膝の上で手を握り締めていた少年は、ふと何かを思った。

「剣を……剣を、教えてくれ」

「ルセカ一……」

シースは切ない瞳で少年を見た。

「あなたは、騎士見習いだものね。でも、剣を取らなくても、生きていけるのよ？ 普通に暮らしていくなら、剣を持たないほうが幸せに生きていくれる。騎士にならなくとも、この邸やしきで働いていくれるし……」

「剣が使えないと、守れない！」

守られてるばかりで、無力で、悔しくて。もうそんなのは「めんだった。

二人の間に、長いこと沈黙が横たわった。

そしてシースティアは、その日、頷くことはせず、ルセカ一に眠るよう命じたのだった。

翌朝。明るい日差しが暗闇を取り払う。人の心からも。たとえ、表面だけであつたとしても。

口元には「こんだティーカップを離して、シースは小さい溜め息をついた。

「どうかしたのかね？」

食卓を挟んだ席で、ソール・デレフ伯爵は娘の様子を見兼ねて言った。十九の娘に悩みの一つあってもおかしくはないのだから、溜め息一つくらいで年頃の娘の胸のうちに踏み込んだりはしない伯爵ではあつたが、シースの手が食事を止めるにつけ、ぼんやりとしては何かを考え込む素振り。そして溜め息とくれば、聞かぬのも気が咎めた。

顔をあげたシースは、伯爵が自分の顔を見つめているのにじめて気づいたような顔だった。

「……ルセカ一が、剣を教えるというの」

「ほう、自発的には、いい事じやないかね」

伯爵の言葉に、シースは少し眼を丸くした。

伯爵は、我が子に優しく微笑んだ。

「わかつてているよ。お前が、まわりの者を危険な目にあわせたくないと思つてしているのは。けれども、彼は騎士を志した。これまでの生き方も、想像するに、危険と隣り合わせだつたんじゃないだろうか。シースティア、お前の気持ちが、彼を殺すことだつてあるかもしけないよ」

「それは……！」

「もちろん、彼はいい子だし、このまま我が家で働いてもらつのは大歓迎だ。あとは、お前がよく考えて決めなさい」

あの子は、きっと束縛すれば、反抗するだろう。一人で生き抜いてきた子だ。どうすればいいのだろう……。

「お茶を入れなおしましようか？ シースティアお嬢様」

給仕の番をするクレアが、思考のうちに籠もりそうなシースに声を掛けた。気分転換してはいかがですか？ そう言ったのだ。

シーズは、冷めたカップの中身を見下ろして、首を振った。

「いいえ、もう十分よ。ありがとう」

クレアの心配りを理解して、シーズは微笑んだ。

「お父さま、ひとつ聞きたいのだけど」

「なんだね？」

「ワーズ・ワスマイルとは、何者なの？」

伯爵の表情が、ぴくりと反応したが、彼は隠さなかつた。

「仕事の協力者だ」

「どういう？」

「彼には旧フローリア公国領の方で働いてもらつていい。内容は、詳しく述べないがね」

ちょうど、シーズティアが生まれた年のことである。サークイス王國は隣国で友好国でもあつたフローリア公国を併呑した。ローケアーク地方の長引く戦乱により、大量の難民が流れこんだフローリア公国に対して、統治力不足と治安維持の支援という名目で派遣されたサークイスの軍勢は、公国の軍隊と一緒に即発の状況を作り出し、公国軍を暴発させて一気に武力制圧したのである。まったくもつて強引な侵略劇だつた。

この事件で政治的に功績があつたのが当時デレフ子爵だったシースティアの父ジョゼフだ。彼はその功績により、フローリア公国のソール子爵領を伯爵号とともに与えられ、ソール・デレフ伯爵となつた。ただ、伯爵号は彼一代のみで、ソール子爵領は子孫の代で分家するように定められている。ソールは、デレフと隣り合わせではなく、飛び地だからだ。占領地の管理の苦労は並みではない。したがつて、管理させる代わり、領地の倍増を報償としたわけだ。

「ソール子爵領か……」

ソール・デレフ伯爵領でフローリア公国側と zwar と、ソール子爵領であるから、シーズは必然的にソール子爵領に思い至つた。

「では、『ギゼ』って？」

シーズがそれを口にすると、伯爵の食事の手が止まつた。しかし、

動じた様子はない。

「盗み聞きとは、あまり感心しないな」

この邸でギゼという言葉が発せられたのは、昨夜のワーズとの会談でのみだ。伯爵の語調が、めずらしく、わずかだが厳しいものに変わる。それだけ重要な事なのだろう。

「ごめんなさい、自分の従者を躊躇ようとしたら、偶然聞こえたの一方のシースは、悪びれずに淡々と言つた。

「ルセカ一も、聞いていたのかね？」

「たぶん、ほんの少しだけよ。すぐに見つけたから。でも、許してあげて。自分がことが話されていれば、気になるのは当然だわ」

自分のことは棚に上げて擁護する。

「わかった。お仕置きはなしにしておくとしよう」

一瞬見せた厳しさが幻であるかのように、伯爵は冗談めいた口調で言つた。

「でも、私の従者がお父さまのお仕事で話題になるといつのは、私だって興味があるわ」

「当然だな……そう、彼はある時から、ある人間にとつて、ただの少年ではなくなった、ということだろうか……」

結局、伯爵の口から聞けたのはそれだけだった。シースもシースで、取り立てて聞き出そとはしなかったのだが。
出仕の時間もあってシースは席を立つた。気にもなるが父は話すまい。そう理解しているのだ。

身仕度を終えてシースが厩舎に足を運ぶと、なんとルセカ一が馬装をすませて待ち構えているではないか。

「ルセカ一、体調は大丈夫なの？」

「もう治つた」

「くくりと頷いてシースをやや見上げる眼差しは、連れていけ、でもなきや付いていくと訴えている。シースは、制止の言葉を飲み込

んで微笑んだ。
「行きましょう、遅れるわ」

王都サークスの正門となれば、その出入りする人の数はただ一言に多い。百名に及ぶ門兵を含めた警備兵が、高くそびえる城壁上や、門の脇から目を光らせているから、怪しげな人間などは即座に取り調べられる。もちろん、本当に怪しむべき人間が目で見てそうと分かる格好はしない。

人の流れのなかに、行商人が混じっていたとして、それを異物と見るのは不可能であった。

行商人こと、ワーズ・ワスマイルは馬車一台、品物を満載して王都を悠々とあとにした。

行商に出掛けた様にみえて、品物は仲間への土産だし、皆に必要な物資だ。何よりの土産は、伯爵から得た情報である。

『近々、リシャール王子の命令で、大規模な軍事行動が旧フローリア領で予定されているそうだ』

『目的は反乱分子の殲滅か？』

『最終的にはそうなるだろう。具体的には正式に命令があるまでわからぬ』

『これは、ギゼに戻る必要があるな。万が一の準備もせねばいかんだろうし、フローリア再建派の連中に教えてやらんとな……』

『ギゼは動くのかね？』

『正直、迷ってる。ルセカーなら……もちろん、ちびじゃない方だが、あいつならどうするだろうかとか、色々考えるがな。俺には決めかねるよ』

昨夜、伯爵の前で冗談めかしく肩を竦めてみせたが、決断のときは迫っている。

器じやねえなあ。ワーズは、春の青々しい空を、あきらめに近い心境で見上げた。

お城への道を、ルセカーオの供で歩くのは久方ぶりであった。少年が元気になつたというのは嬉しいことである。しかし、彼に剣術を仕込むのには、少なからず迷いがあつた。そもそも、ルセカーオは騎士を目指すために騎士見習いになつたのだ。剣の道を避けては通れない。なのに今になつて、彼に剣を持たせることに、これほどの抵抗感があるのはどうしてだろう。

道々、シースは無口だった。ルセカーオの、元来の寡黙さもあって、道中ひと言も一人は交わさなかつた。

いつもと同じように騎士門をぐるりとしたシースティアの耳に、門兵が騎士長の召喚を報せた。

シースがルセカーオに馬を預けて城内に入ると、先程の門兵がルセカーオを手招きした。若い兵士だが、シースとルセカーオよりも年は上に見える。

「なあ、シースティア様、ほんやりしてゐみたいだが、気をつけろよ？」

兵士の言葉に、ルセカーオは首を傾げた。

「ソール・デレフ家はいま危ないんだろう？」「こういう時にあんな氣の抜けた顔されると、心配になつちまつ」

ルセカーオは力強く頷いた。シースの従者である今の理由は、そこにある気がする。なんだか知らないけど、世話になつてる家が困っているのは、見過ごせないことだ。

「旧フローリア領で演習？」

騎士長執務室での通達事項がそれだつた。内容に関しては寝耳に水である。

「そうだ。部下にあたる従騎士、従者に伝達するよ！」。準備も含めての訓練だ。ぬかりないようにな」

面食らつた様子のシースティアに、騎士長は重ねて言つた。

「しかし騎士長、フローリアの反乱分子を刺激しませんか？ 彼らの活動は未だ根強いと聞きますが」

「王太子殿下の」ト命だ。家臣団でも十分に吟味が為された。その

判断だ」

「殿下の……」

リシャールの……。

かれこれ十数年。リシャール王子の築き上げた実績と信頼によつて、人々は知らず知らず、手放しに彼の指示に従うきらいがあつた。騎士長にしても、文武にすぐれ、騎士団をまとめあげる人格もそなえた人物だが、型にはまり過ぎているのかもしねい。

脳裏に恋人の面影を浮かべたシースは、執務室を出たあとに行き先を決めていた。

馬を厩舎に預けてきたルセカ一は、いつもどおりシースティアの部屋で彼女を待っていた。病み上がりの今日は、特に用を言い付けられなければ仕事がない。手持ち無沙汰のなぐさめに、ルセカ一は剣を持つ想像をして、握りや構えを確かめたりした。今まで運動神経や勘に頼つた我流だったが、手練れを相手にするにはあまりにも経験不足だと感じるのだ。

「ルセカ一、いる？」

扉が開くが早いか、シースが呼んだ。

「なあ、剣を……」

「まだ用事が終わつてないの。ルーヤの手伝いでもしておいて。いろいろ助けてもらつたでしょう？」

言い終わるや、シースはそのまま廊下を歩いていく。ルセカ一は戸口を出て呼び止めた。

「どこへ行くんだ？」

「リシャール殿下のところよ」

一瞬、ルセカ一の脳裏は空白になつて、その後無性に体を動か

したくなつた。シースの言い付けなどは、そのイライラに流されてどこへやらだ。

「剣くらい教えてくれればいいのに」

ぶつぶつと呟きながら、持ち出した訓練用の木剣を庭で振るのであつた。

リシャールの侍従に、自分のことがどういふらわれてゐるのかは知らないが、シースティアは執務で忙しいはずの王子にすんなりと面会することができた。

侍従がさがるや否や、シースは本題を切り出した。

「旧フローリアで演習を行なうそうですね」

「うん。騎士長から聞いたのだね？」

リシャールは、執務室の机に腰を寄り掛からせると、肩にかかる長い銀髪を手櫛で搔きあげた。銀髪にくわえ、美的均衡の取れたあごの輪郭で囲われた容貌は、万人がみとめる貴公子の姿であつた。口頃の忙しさを感じさせない緩やかな口調で、彼はシースに理由を語つた。

「無論、危険はある。演習がそのまま実戦に変わる可能性がね。でも、それは望むところなんだよ」

「反乱分子をいぶりだせれば良いことこのことなの？」

「そういうこと。我が騎士団の練度は、そういう事態に十分対応できると信じてこる」

「それは騎士長についてあげて。よひいぶから」

ふふっ、とシースは微笑をこぼす。

「ところで、騎士長に別の仕事を書面で回したのだが、聞いているかな」

「いいえ。どんなこと？」

「富廷騎士に調査してもらいたい。私の直属の部下が殺された」
ただならぬ内容にシースの眉根が寄る。

「場所は、王都の城壁外。計画農作地の水車小屋で死体が発見された。見つかったのは四日前だが、連絡が途絶えたのは一週間ほど前からだ」

シースティアは記憶の中から情報と符合するものを探した。

「一週間前……ルセカーラが襲われたのと同じ頃だわ」

思い当たるのはそれだけ。関連性は薄そうだ。情報は追つて探さなければ事件には役立つまい。

「ルセカーラ」というと、君の従者だね？ 無事なのかい？」

「ええ、一時は危なかつたけど、今は元気よ」

「すまない、気づいてあげられなくて」

シースティアをいたわる様に、リシャールはその頬に触れた。彼とて彼女の前の従者が死んだのは知っていた。

「いいの。心配掛けたくないから」

頬と首筋にかかる手が、とても心地よかつた。

「しかし、そうとなるとこの王都に、物騒な人間が入り込んでいるということになるね」

「物騒な……人間……」

ワーズ・ワスマイル。あの怪しげな人物の名が真っ先に思い浮かぶ。すると、脳裏に符合したものが、奇妙な繋がりを思させて怖かつた。父ジョゼフすら、その糸に絡まつてくるのだ。

「どうかしたのかい？」

シースティアの顔色はすぐれなかつた。

「血なまぐさい話はここまでにして、お茶でも淹れさせよう」

騎士団棟の中庭で、ルセカーレは黙々と訓練用の木剣を振っていた。「元気になつたのは良かったけどね、剣が振れるくらい治つたんだら、ちょっとは手伝いなさいよ」

通りかかったルーヤが、小言を投げかける。「うそくなりそうだつたが、さっさと行つてしまつた。

「まったく、誰が面倒見たと思ってんの。曲がりなりにも女子寄宿舎の部屋の寝台を貸し与えたつていうのに」「

と思つたら、あちこちをいつたり来たりするたびに、中庭を通りかかる。

ルーヤは、書類を運んだかと思えば、誰かに呼ばれてそちらへ駆けて、誰かに請われてはそちらへ走つた。

「いいご身分ねえ。一週間ぐうたら寝てたと思つたら、今度は健康的に運動なんてえ」

通つては一言残し、ルセカーレは剣を振る風鳴りでそれを搔き消す。「ま……つたく、ほんつ……とに、もう！」

力の入つた声で、ずしづしこう足音が聞こえそうな歩みとともに、ルーヤは再び通りかかつた。今度は鎧を運んでいるのだ。大の男が、体にきつちりと当て着込んで重たい鎧だ。少女が手に提げて容易に運べる重さではない。

中庭に面した廊下の手すりに一旦重みをあずけて呼吸を整えていたルーヤに、ルセカーレは観念して声を掛けた。

「わかった。手伝う

その一言を引き出したいのだろうとばかりルセカーレは思つていたのに、ルーヤは突っぱねた。

「いいわよ、あんたの手伝いなんか。中途半端な仕事をされて尻拭いするほうが面倒なんだから

今回ばかりは、明らかに強がりである。

「そんなわけ、いかないだ！」

言い出したからこそそう思つが、鎧運びはルーヤには荷が勝ちすぐれた。

「いいから！ 武骨モノは剣の練習でもしてなさい。あんたが、一番シースティア様のお側にいるんだから！」

あ、トルセカーは少女の気遣いを理解した。と同時に理解に苦しむ顔をする。

「じゃあ、なんで不機嫌そうなんだ？」

「腹が立つのも本當だからよ！」

ずしづしど、再び歩き去るルーヤであった。

騎士団棟の中庭で、ルセカ一は黙々と訓練用の木剣を振っていた。少女従者の心情は分かつたような分からなかつたような。でも、心意気は汲み取つた。木剣の素振りにも力が入るといつものだ。

「なつちやおらんな」

その声に、揚々とした気持ちが台無しになつた。

中庭は、騎士団棟のどこへも通じてゐる。その男の日に留まらずに済むわけもなかつた。

シースティアの目の上のたんこぶ、と酒場の主人が評した。それを思い返すと少し頬が緩む。そこへすかさず不機嫌にさせる台詞を突つ込むのも、ガブレイという男のなせる業ということか。

「そんな腕では暗殺者が襲つてきても倒せんぞ」

むつとした顔つきでルセカ一は睨み返した。

「面構えだけは、一人前だな？　どうだ、稽古してやろうではないか」

ガブレイは、木剣を携えていた。端からそのつもりだつたに違いない。

ルセカ一が構えると、罠にかかつた獲物を見るように、ガブレイ

はにやりと笑つた。

次の瞬間、鋭い風鳴りとともにガブレイの剣が繰り出されると、ルセカ一の目に留まる前にそれは手を打ち、あつといつ間に剣を落としてしまつた。

ルセカ一の頬を、剣を落としたことを罰するようにガブレイの木剣が打つ。手首を使つたそれは、鞭のように頬を叩いた。ガブレイが本気であれば、頭部を殴られて昏倒していたはずだ。本物の剣であれば首が飛んでいる。

「拾え」

ガブレイは余裕を見せた。当然だ。彼はルセカ一に相対してから

一步も動いていないのだ。

これが修練を積んだ騎士との実力の違いであった。ルセカ一は身体能力と、状況に対応した勘と捨て身の動きで危機は乗り越えられても、真っ向から剣の技量をぶつけ合うことを知らないのである。ガブレイの精神性はどうあれ、その剣は正統なものであった。

まだしびれる手で剣を拾う。両手でしっかりと持たないと、打たれた手は握力が感じられなかつた。

右、左、ガブレイの打ち込みがルセカ一の腕、足、動を叩く。体は反応するが剣さばきが追いつかない。

「どうした、打つてこい」

打ち込みをやめて剣を下ろしたガブレイに、ルセカ一は思い切り剣を振り下ろした。だが、その剣を打ち返され、見事に足を掬われて地べたに転んだ。

砂をなめるルセカ一の頭をガブレイは踏みつけた。

「どうだ小僧。騎士になるのは諦めて、ここから出て行くか」

歯を食いしばって力を込める。

「あき……らめない」

足を払いのけて立ち上がったルセカ一は、再びガブレイに打ち込んだが、一つ空を切ることに、二つ三つと体を打ち据えられることの繰り返し。ついに腕が上がらなくなつたルセカ一は剣を抱えるように体ごと突きを繰り出した。切つ先が迫らんとする寸前で、ルセカ一の突進をガブレイは一振りして叩き伏せた。ルセカ一の意識は、そこで暗転した。

「ふん、身のほどを知れ」

台詞を吐き捨てたガブレイだが、いつの間にか息が上がつていた。

夕方、宫廷騎士シースティア・ラ・ソールは憇だらけの従者をしたがえて騎士門を出た。

はじめ驚いたシースティアは、ルセカ一の傷をあらためながら話を聞きだした。そして、これだけ打ち据えられていながら骨折がないことに、ガブレイもさすがの宫廷騎士であると認めざるを得ない心境となり、さらに病み上がりが今度は怪我人と成り果てた少年に呆れて、ガブレイへの沸騰した怒りは直ちに収まった。

打撲の痛みにぎくしゃくと歩く従者を、馬上から見かねてシーストは言った。

「今日は特別に乗りなさい」

「う、いい。誰が、この程度の、傷で」

ありありと分かる強がりは、文節ごとに痛みを堪えなければならなかつた。

「そうじやなくて、そんなんで馬を曳かれたら、お尻が痛くてしかたないのよ」

たしかに、いつかのように馬脚は乱れるばかり。そしてこの歩調ではいつ邸にたどり着くか分かつたものではなかつた。

「さあ、早く乗つて。あなたの歩く速度に合わせてられないわ」ルセカ一は眉間にしわを寄せてシースの差し出す手をしばし眺めていた。

「よつかかつてもいいわよ」

手綱と、それを握る腕の輪の中に収まつた

「冗談…………だろ」

「あ、そ」

シースは乗馬を歩かせる。すると歩むたび、ぴしひしと傷が痛み、腹筋に力を入れる事さ

え辛くなつた。観念したルセカ一は息を吐いてシースの腕の中に寄

り掛かる。肌の香りと

ぬくもりがいい様もなく心地好い。それだけで痛みが引くようだつた。

シースは何も言わずに、どこか懐かしい調べを口ずさんだ。

「どつかで、聴いたような曲だな」

「そう？」即興よ

楽しげにシースティアは答える。

「ふうん……子守唄になりそうだ」

「眠りなさい。帰つたら、起こしてあげるわ」

ルセカ一は返事に窮した。守らなくてはならないのに眠つてなどいられるか、そう思うのだが、痛みに根負けして体は睡魔を受け入れてしまいそうだった。

「今晩は熱が出るかもしれないから、辛くなつたら我慢せずに呼びなさい」

いつの間に眠つていたのか。気づくとまたルセカ一はあの時のように寝台の上で、暗闇の中の四角い明かりの中から、シースがそつと声をかけて扉を閉じたのに気づいた。気づいてまた、眠りに落ちた。

翌朝の出仕の時刻に、シースはまたしても独り馬上に在った。騎士であれば当然従者が焼くはずの世話を、侍女のクレアがしてくれるので遅刻の心配は無い。かつてであれば、クレアはエレという少女従者の立ち位置に遠慮してシースティアの身の回りに踏み込んでこなかつたものだが、これもルセカーガ従者として邸の一員に加わった効果だろうか。

ああ、こうして人の心は癒されていくのだな、とシースは睡魔を抱えた脳裏で客観視していた。

何も知らないルセカーガ、エレの死によつてできた穴を埋めてしまつた。だから、クレアもシースティアの傷に触れてしまうことを恐れずに世話が出来た。

騎士門に着くと、見慣れた門番が彼女を出迎えた。

「あれ？ シースティア様、今日はルセカーガのやつは？」

門番が、少年の名前を出して気に掛けているのに、少なからずシースティアは驚いた。

「ガブレイ殿にこてんぱんにやられて、寝台に逆戻りよ」

そんな朝の挨拶で始まつた一日。同じような質問を、騎士団棟のなかでも耳にすると、素直に感心する。

「やあ、従者殿は今日はお休みだつて？」

例えはそんな同僚の軽口であった。

いつのまにか、我が従者は自分の身の回りの人々に慣れ親しんでいるようだつた。

お昼時、中庭で休憩しているルーヤを見つけて声を掛けたシースティアは、その事を話してみた。

「ドタバタして目立つていいだけですよ」

二人は中庭にお茶とお菓子を用意して、お喋りの態勢を整えた。

ルーヤはシースティアの言葉を一刀両断。そんな風に評される少年

に憐憫の情すらわきそ�だ。

「でもまあ、あいつには感謝もしてるんですよ」

「あら、どうして？」

「だって、シースティア様が、明るくなつたから
照れを隠すように、ルーヤはティーカップに口をつけた。

「そう……なの？」

それは新鮮な驚きだつた。

自分自身は、気丈にしているつもりだつた。そんな自分をいたわ
つてくれる周囲に気づかず、そしてまた心の傷が癒えていく自分を、
好ましく見てくれている人がいたとは。

「そうかも……」

あのぶつきらぼうな少年は、いつの間にか我が家に馴染んで、父
娘だけでなく、使用人たちにも気に入られてしまつた。

エレガたおやかな花なら、あの少年はまっすぐ伸び育つていく若
木だ。いつか大樹となつて、木陰にひとを休ませてくれるような人
物になるかもしれない。

「ありがとう、いい話を聞かせてもらつたわ」

カップを口元に運びながら、シースティアは言つた。湧き上がる
湯気が、頬に当たつてこそばゆい感じがした。

その日の帰り、シースティアは早々に仕事を切り上げて、街中の店に立ち寄った。

戸を開け、薄暗い屋内に足を入れる。差し込む光は十分にあるようで、目が慣れるに暗がりもほど良い。棚に並ぶ薬品のことを考えて、光と熱をあまり入れないようにしているのだろう。

「やあ、シースティア」

店の奥からその姿を確認した老人は、一度奥に姿を消すと包みを持つて現れた。

「こいつは、大した代物だ。ルセカーノの剣だよ」

無骨な鞘から、同じく飾り気のない柄を握つて刀身を引き抜く。「ええ、たしかにこの剣の持ち主はルセカーノという少年だけれど」「お前さんの従者がルセカーノという名前というのが偶然かどうか儂には分からんが、これ

はあのルセカーノの剣だ」

老人が刃を光にかざすと、鈍い光を反射した。

「どういうこと?」

「ローケアーノの騎士ルセカーノだよ。最も新しい伝説の騎士の剣だ」「それで、あんたの依頼の通りに、分かることは全部調べた」

老人は少し難しい顔をして息を吐いた。

「剣とは、確かにそうする為に作られたものだが」

「なに?」

実用一点張りにも見えるルセカーノ剣を、老人は名残りを惜しんで鞘に收め、布に包んだ。

「この剣は、ごく最近、人を斬つてある。多分、相手は死んでるはずだ」

それはつまりどういうことなのだ。

「そんなはずは……」

この剣は、ルセカ一の持ち物はあるが、自分が預かり保管している。その事実から、ありえないと即座に否定したが、埋めがたい穴がその事実にあることにも気づいていた。

シースは老人の顔を見た。

老人は、顔を横に振る。

「儂は、考える材料を提供する。じゃが、この先を考え、判断するのは儂の仕事ではない」

その言葉は脳裏に反響するばかりで、もはやシースの思考には達していなかつた。

この剣は、先日一度だけ、少年の手に返されている。その一日の空白が、どうしてもこの剣の殺人を否定できない。

そして、彼は命の危険をともなう傷を負つて帰つてきた。

そうだ、彼を襲つたのが複数人であれば、そして少年がその一人を屠つただけであれば。

だが。

彼は何をしに出かけた？

父の使いで、いつたいなにを？ 疑惑が父親にまで波及する。

シースティアは、行きづまり、よどむ思考を振り払つた。

「調べてくれてありがとう。お礼はまた届けさせるわ」

ルセカ一の剣を受け取つて彼女は背を向ける。長い髪がすべるその背中を、老人は呼び止めた。

「情報を一つ。剣を調べているときに聞いた噂だ。いま、ルセカ一は旧フローリア公国にいる、商人が言つていた」

一度立ち止まつたシースティアは、振り向かずに言つた。

「また来るわ」

ルセカ一が目覚めた廊下がりの邸は、とても静かだつた。前に寝込んだときも同じだつたから解る。使用人たちも、ひととおりの仕事を追えてめいめいに過ごしているのだ。

体調はすっかり良くなつっていた。もちろん、あちこち痛むけれど、活発な少年の体を妨げるものではなかつた。

寝台を抜け出し、部屋を出る。従者としてあてがわれた、シースティアの寝室の小さな隣室であるが、そこは伯爵の部屋にも近い。窓からいっぱいに日の差し込む廊下は、無人で人の気配はなかつた。

そつと廊下を歩きだす。

「やあ」

と、予期せぬ声にルセカ一の心臓は跳ね上がつた。

「具合はどうかね」

ソール・デレフ伯爵が、ちょうど差し込んでいた口差しのような朗らかな笑顔でそこに立つていた。まったく気配を感じなかつたといつのに。

そういうえば、伯爵はデレフ子爵であつた頃、騎士として戦場に立つたこともあるのだと、古株の使用人から聞いたことがある。実は相当の強者なのではないかとルセカ一の頭の中で思考はめぐつた。「体調がよければ、中庭で一緒にお茶にしないかね。部屋で寝てばかりでは、気持ちが澁むだろう」

断る理由を探す前に、ルセカ一の首はたてに動いていた。

白いテーブルに白いカップ。クレアが穏やかな表情で注ぐお茶から湯気が昇つた。

一礼して辞去するクレアを見送ると、ルセカ一は伯爵に勧められ

るまま、カップを口に運ぶ。

その表情をみて伯爵は笑った。

「苦いかね？ 砂糖を存分に入れたまえ」

伯爵は砂糖の入れ物をルセカーの前に置いた。

「苦味の旨さは慣れだと私は思うのだよ。砂糖の量を少しずつ減らして、次第に茶の味を直接知っていく。苦味のなかに、旨さを探せるようになる」

そんな日が来るのだろうかと、ルセカーは即座に疑った。

「人生も、この齢に至つて、そつしたものではないかと思つようになつたよ」

そう言つて、伯爵は何も足さないお茶に口をつけた。

「この家を頻繁に刺客が狙つている」

ひとくち。ゆっくりと味わつてカップを皿に下ろした伯爵が発した言葉だ。

「君も身をもつて体験してしまつたし、エレの事も耳に入つていることだらう」

ルセカーのお茶も、あまり減つていなかつた。砂糖で苦味は消したけれど、熱いお茶は勢いよく飲めなかつた。熱さ以上に、エレの話題を暢気にお茶を飲みながら聞いてはいられない。

「ルセカー、君に頼みがある」

伯爵の目は穏やかに、しかしどても真剣だ。

「あの子を守つてくれ」

それは当然だ。でもルセカーは安易に頷かなかつた。拒むつもりはないが、伯爵の真意はより深いところにあると、肌で感じ取つたからだ。

「何が敵で、何が味方かわからない状況であつても、君だけは、あの子の絶対の味方であつて欲しい」

何が敵で、何が味方か……だが、そういう口ぶりの伯爵には……。

「何が敵か、知つているように聞こえる」

静かに少年を見つめたあと、伯爵は微笑した。

「例えば、あの子が君を敵と見なして、命を奪おうとしても、君は真実あの子の味方でいて欲しい」

とんでもない仮定の話に、ルセカ一は一段ずつ踏まえてきた会話の階段をがくんと踏み外した。

伯爵は少年が心の態勢を立て直すのを待つよつこ、お茶で口を湿らせる。

「本来、それは親の役目なのだがね」

沈黙を、お茶に混ぜる砂糖のように空氣に溶かしながら、伯爵は言葉を継いだ。

「新しきルセカ一、どうか娘を守つて欲しい」

少年の瞳を静かな瞳で見つめて、ソール・デレフ伯ジヨゼフは言った。ルセカ一は、胸の中で伯爵の言葉が反響しながら跳ね返るばかりで、うまい返答が思い浮かばなかつた。なにか、言葉を返してあげなければいけない。それも今この場で。強烈にそんな想いに駆られるのに、何も出て来ない。

伯爵はルセカ一の様子に微笑むと、その言葉を残したまま席を立つた。ルセカ一は座つたまま、伯爵の心情を考えつづけた。わからなかつた。

最後に、すっかり冷え切つたお茶を一息に飲み干す。
砂糖で甘いはずなのに、どこか渋味が消えなかつた。

1-1（後書き）

感想などお待ちしております。お気軽ご用ひ下さい。

王都サークの城門をくぐつた騎士と歩兵の列が、整然と街道を西へと出発した。

目的地は、十九年前にサークス王国が併呑した旧フローリア公国領である。

サークス王国の王都サークから、旧フローリア公国領での演習に進発した一個軍は、現地に駐屯する騎士団を加えて八〇〇〇名に達する予定であった。

現在は合流前の六〇〇〇名が行軍している。正騎士、従騎士、従者を含めた歩兵、輜重などの荷駄が整然と列を成して街道を進むのは威容であった。街道を行く人々や、通過する村や町の人々が、珍しげに手を振つたり見物したりした。

実戦ではなく、演習であることが噂で広まっている様子で、人々が不安に陥ることはなかつた。

また、実戦でないことは行軍する側の精神も少し気楽にさせた。人々に手を振り返し、笑顔で表情をほころばせ、上官も隊列さえ乱さなければあまりそれをどがめてなかつた。

そんな気の緩みがちな列のなか、馬上で氣のない表情をシースティアはしていた。

『先日の質問を繰り返すのだけど……』

昨晩、帰宅した彼女は父の私室に赴くなり、ジョゼフに心に決めたように訊ねたのだ。

『ワーズ・ワスマイルとは何者なの?』

『言つたはずだ、仕事の協力者だと』

『そう……では、こないだはルセカーになんの使いをさせたの?』

『ただのお使いだよ』

『うそ』

『嘘ではない』

シースの脳裏には、ある疑惑が渦巻いていた。

リシャール王子の部下が殺された。ちょうどビルセカーが『ルセカーネの剣』を持つて、父ジョゼフの使いに出かけた頃だ。ルセカーは重傷を負い、生死を彷徨つた。だが、一方で彼の剣も人を斬つているという。

なぜ、少年はなにも言わないので。きっとジョゼフの言い付けを守っているのだろう。それはわかる。

そして、あの怪しげなワーズ・ワスマイルという男の口から出る、ルセカーの名。それにギゼとはなに？

ジョゼフは優しい父親であるが、伯爵としての立場もあり、政治的な駆け引きから無縁ではいられない。それがまさか、自分と愛し合う人の障害となる事であつたとしたら？

嘘ではない、そういう父親の顔は、聞き分けのないことを言つ子供を叱る目をしていて、従順であることを強要する。その裏に、いつも自分への優しさがあつたことをシースは知つてゐるし、今も変わりないと信じたい。

「わかった……明日から、演習でしばらく帰れないから」

「ああ、気をつけて行きなさい」

そういう父に背を向ける。ジョゼフがどんな表情なのか

「……シースティア」

呼び止めたジョゼフの気持ちはわからない。ただ、どこかで苛々が抑えられなくて、呼びかけに応じはしたけれど、立ち止まつても振り返りはしなかつた。

父から言葉が続かないのを見計らつて、シースは後ろ手に扉を閉じた。

「シース……シース」

その声で、シースティアは昨夜の回想から無理やり現実に引き戻された。騎乗する彼女の横を歩くルセカーレを、彼女は見下ろした。

「ルセカーレ、無駄口は禁止よ。ほかの者の気が緩んでいても、あなたは新入りも新入りなんだから」

暢気な行軍は列こそ乱さないものの、サー・キスの領内を歩くうちにつつかり遠足気分だ。

一部の事情を知る宫廷騎士たちはさすがにだらけはしなかつたが、目的地までは気を張る必要もなしと、兵や部下を叱ることもない。だが昨日の苛立ちを引きずったシースは、ルセカーレに寛容でいられなかつた。

「今日の野営地に着いたら、剣を教えてくれ」

またなの、といつもの彼女であれば、溜息まじりにあしらうところだ。今日の彼女は、ルセカーレの腰にある剣を横目に見た。

他の従者たちは、簡素な槍と短剣を身につけていますが、ルセカーレの腰には短剣ではなく、いつもはシースが預かっているあの剣が提げられている。

「だめよ。言うことがきけないのなら帰りなさい」

にべもない言葉に、ルセカーレは黙るしかない。

野営地に到着し設営の手伝いが終わると、ルセカーレは一人抜け出して剣を振ることを、この演習での日課として自分に課すことになった。

翌日から、きわめて事務的なやり取りでしか、シースティアと会話をしなくなつた。

もともと寡黙なルセカーレにとって、それは苦痛ではなかつたが、以前の様にそれが自然とも感じられなかつた。

そしてまた野営地に着き、言いつけた用を片付けたルセカーレが、

いつの間にかいなくなることをシースティアも気づいていたが、憤りはなかつた。やることを済ませたならば、それでいい。少年を見ると、あの疑惑がどうしても頭の中で黒々と渦を巻いて嫌だつた。

設営した陣地から離れた物陰を見繕つてルセカ―は剣を抜くと、素振りを始めた。

本当のルセカ―から剣を受け取つて以来、そう何度も使うことがなかつた。しかしこうしてたつた数日、何百と振つただけで腕や肩、背中から腰まで剣を振るうことに体が馴染んでくるのが分かる。

剣の重さに慣れて、ぶれることなく思つた筋どおりに刃が空を断ち切る。

今ならあのガブレイにだつて負けない、いや勝てないまでもここまで一方的ではないはずだ。

「なつちやおらんな」

脳裏に描いた人物の声に、ルセカ―は驚いた。

片方の腰に手をあてて少年の素振りをしばらく観察していた節がある。そして、もう片方の手には、なぜか木剣が一本あつた。

カラーン、と木剣を地面に放り投げ、自分の剣を抜くと、ガブレイは自分の剣を抜いて構えた。次に上段に構え、踏み込みとともに振り下ろす。岩をも割るかの」とく、ごづ、と音をたてて、その騎士の剣は空気を断ち切つた。

明らかにルセカ―の剣とは違つた。ルセカ―の剣は、道具がただ人を殺す。決して技が相手を倒す訳ではないのだ。

ガブレイは顎でルセカ―に促がした。

ルセカ―はよくわからないまま、ガブレイを真似て剣を振り下ろす。

ガブレイのそれとはまったく違つた。猿真似だ。もう一度、もういちど！ ルセカ―はむきになつて繰り返し始めた。

ガブレイが、再び剣を上段に構える。さつきと同じ構えだ。ルセカーハぴたりと素振りをやめ、息を止めて見守った。そしてガブレイがもう一度だけ一連の動作を繰り返した。やはり、ルセカーとは違う風が舞つた。

ルセカーハ、脳裏に焼き付けた動きが消えてしまわないうちに、反復を始めた。

いつたいどのくらい、それに熱中していただろう。一本の木剣を残して、いつのまにかガブレイの姿はなくなっていた。

慌てて野営地に帰ると、とっくに夕飯の炊き出しは終わっていて、シースティアからは飯抜きが言い渡された。幸い、空腹よりも興奮が勝り、興奮が収まるとな疲労による睡魔が勝つて、ルセカーハ翌朝までぐっすり眠つたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9741c/>

ルセカ一の章

2010年12月22日16時10分発行